
バカとテストと召喚獣～in文月学園～

風見鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 in 文月学園

【Nコード】

N7357K

【作者名】

風見鶏

【あらすじ】

ライトノベル『バカとテストと召喚獣』の二次創作小説です。

サッカーバカの主人公が文月学園で愉快的な仲間達とともに学園生活を送ります。

第一問（前書き）

文章能力がない上に、更新もかなりマイペースですが、どうぞよろしくお願いします！

第一問

文月学園に入学してから2度目の春がやってきた。今日は春休み明け最初の登校日。始業式の日だ。

少しサイズの大きい、慣れない新しい制服で、これからの高校生活を想像しながら、初めてここの正門を通ったのがもう1年前になっ
てしまうと思うとなんだか感慨深い。

ほぼ満開の桜が校舎へと続く坂道にこれでもかというほど咲き誇っている。まるで新入生の入学を祝うかのよう。

でもそんな風物詩的なことよりも、これから始まるクラス戦争や新たなクラスメイトとの出会いで頭がいっぱいだっ

坂道が終わり校舎への入り口が見えてきたところに丁度、俺の天敵である教師がどっしりと構えていた。

「げ、鉄人！」

「鉄人じゃない、西村先生と呼べ！」

こんな春先にも関わらず日に焼けているのか肌の色が異様に黒く、どっしりとした体格。

おまけに興味がトリアスロンということもあり、生徒からは鉄人という愛称で親しまれている補習の鬼教師、西村先生。

「まあそれはいい。ほれ、受け取れ。振り分け試験の結果だ」

そう言って渡されたのは1通の封筒。封筒の表には大きく俺の名前。『椎名聡』と記されていた。

振り分け試験といわれるのは学年末に行われたテストで、そのテストの成績によってクラス分けがされるのだ。

普通の高校のクラス替えなら文系と理系で分かれるって感じだけど、この文月学園は少し違っている。

テストの点数が良い順からAクラスになっていき、1番低いクラスがFクラスということになる。

「なんでこんな面倒くさいことしてるんですか？掲示板に貼ったりすれば……」

「そうすればいいんだがなあ。ウチは世界的にも注目されている最先端システムが導入されていることもあってそれもその一環ってことだ」

まあたしかに今の時代、プライバシーの問題とか色々あって先生も大変なのかもしれない。

そして封筒を開けて中に半分に折られている紙を取り出した。

どうやらここに俺が1年間過ごす教室が書かれているらしい。

振り分け試験は我ながら悪くもなきや良くもないってところだし・・・
・うん、CクラスかDクラスぐらいが妥当だろうか。

「椎名。今だから言うが、俺はお前を1年間見てきてコイツは馬鹿

なんじゃないかと疑いを抱いていた」

「やれやれ、これだからつじ　、西村先生は、そんな誤解をしていたら今に『節穴』ってあだ名に変わりますよ?」

俺が馬鹿だなんて、まさか。

「そうだな、でも先生はこの振り分け試験の結果を見て確信した。
お前は正真正銘の　」

折られた紙を広げるとそこには達筆な字で大きくこう書かれていた。

『椎名聡・・・Fクラス』

「正真正銘の馬鹿だ」

おかしい。これはきつと何かの間違いだ！

「え、っと、いや、これ間違いですよ？俺大体7割ぐらいはちゃんと埋めましたよ！」

「ああ、頑張つて埋めた点は評価してやる。その答えである7割のうち半分は採点している教師が思わず吹き出してしまうような珍回答だったんだからな」

「・・・」

「こうして俺の騒がしい一年がスタートした。」

第二問

「なんだよ、Fクラスって……最下位クラスじゃん……」

1学年の教室は2階にあったため、2学年の教室が並ぶ3階に足を運ぶ機会はあまりない。

なので初めてというわけでもないのだが、少し新鮮な気がする。

そして旧校舎側にある2年Fクラスを目指して廊下を歩いている。すると普通の教室の5倍ほどあるのではないかと疑いを抱くような馬鹿でかいような教室が1つあるのに気がついた。

その教室のクラスプレートにはこう記されていた。

『2年Aクラス・・・・・・・・』

これが噂のAクラスの教室か・・・・・・・・。

足を止め、これまた大きな窓から中の様子を覗いてみる。

するとそこにはノートパソコン、リクライニングシート、個人冷蔵庫など、有名私立校でもなかなかお目にかかれないほどの施設が整っていた。

「Aクラスがこんなに豪華なんだし、Fクラスだって普通の教室より少しボロいぐらいできっと済む……かな？」

そんなわずかな希望が生まれたところで、再びFクラスへと足を運んだ。

やがてFクラスに到着すると、そのわずかながらの希望が全て崩れ落ちた。

クラスプレートはAクラスはプラスチック製か何かだったにも関わらずこちらは木製。しかもかなりボロくて折れかけている。

もちろんそれだけではない。中に入ればちゃぶだい、きのこの生えている畳、布が切れて綿が見えてしまっただけにも使い古されている座布団等、とてもAクラスと同じ学校にある教室とは思えない設備だ。

「これが格差社会というやつか……」

「椎名君、席についてください」

先ほどの望みが全て遮られ、現実の厳しさに思わず拳を握っている

と教壇に立っている先生から声をかけられた。

スーツに眼鏡な初老の先生で見るからにFクラスの担任って感じだ。でも鉄人みたいに厳しくはなさそう、これは俺にとっては好都合かもしれない。

「えー、と、俺の席はどこですか？」

「好きな席へどうぞ」

席も決まってるない？最初は普通出席番号順に座ったりするもんだとばかり思っていたけど……

そして適当に空いている席を探す。

初日にも関わらず、寝ている人や先生に見られないように携帯電話をいじっている姿はまさに成績最下位クラスの姿だった。

ということで俺も適当に席を選んでみた。一番後ろの窓側の席だ。

授業をサボって漫画を読んだり、ゲームをするにはこれ以上ない席だ。やはり席というのは先を見据えないとね。

そして座布団に腰掛けようとした時、座布団に違和感を感じる。

「先生、この座布団綿が全然入ってないんですけど」

「我慢してください」

即答か……。まあ、いいや。隣はまだ誰も座っていないから取替えちまおう。って隣の座布団も全然綿が入っていないじゃないか。

すると次は窓が空いてないにもかかわらず冷たい風が入ってくる。

「先生、隙間風が寒いんですけど」

「我慢してください」

あれ……さっきと同じ答え……。

そしてカバンをちゃぶ台の上に置くと次の瞬間、パキパキッという効果音とともにちゃぶ台の足が折れた。

「先生、ちゃぶ台の足が折れたんですけど」

「我慢してください」

「いや、無理だって！」

これはさすがに無理だ。グラグラして何も上に置けやしない。

「はっはっは、冗談ですよ」

そう言って先生は木工用ボンドを取り出した。まさかそれで直せとも？

何故Aクラスは30年や40年も先の未来の教室のようになっていて、このFクラスは400年も昔の江戸時代の寺子屋のような教室で勉強をしないとイケないのだろうか。

やっぱりもうちょっと勉強しておけば良かったかな……。

キーンコーンカーンコーン

朝のHRの始まりを告げるチャイムが校舎中に鳴り響いた。

いよいよ、この2年Fクラスでの一年間が正式に始まるのかと思っ
ていると、一人の男子生徒が遅刻で教室に入ってきた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「吉井君、早く席についてください。遅刻になりますよ」

入ってきたのは吉井明久。茶色っぽい髪をしていて身長は俺と変わ
らないか、明久の方が数センチ大きいくらい。

1年のときからの悪友であり、2学年1の馬鹿である。

そんなばk 明久は俺の隣の席に腰をかけた。

「おっす、明久」

「あ、聡！」

「やっぱり、明久はFクラスだよな」

「聡……キミにもそのセリフきっちり返させてもらおうよ……」

まあ知り合いがいて良かった。でももう一人、一年のときにつるんでいた悪友もFクラスに来ると思ったんだけど……。

「いやー、それにしてもひどい教室だね、ここで1年間過ごすのかあ……」

明久の言うとおり、こんなボロい教室で1年間を過ごすと思うとなんだか悲しくなってくる。

「文句があるなら、振り分け試験で良い点取っとけよ」

「お、雄二、やっぱり雄二もFクラスなんだな」

赤く立った髪に、身長は180センチほどの長身。細身ながらもなかなかの筋肉質の体系はボクサーのような感じがする。

明久と同じく悪友の坂本雄二だ。

「うんうん、俺もきつと雄二はFクラスに来ると思ってたよ」

俺の言ったことに明久も同意してくる。

「お前等だけには絶対に言われなくなかった……」

何その俺と明久の扱い……。っていうか俺と明久って同じような扱いなの？！

「ほら、そこ、静かにしてください」

先生の注意が入る。そして先生は自己紹介を始めた。

「えー、と改めて、2年F組担任の福原慎です。1年間よろしくお
願います」

そう言って黒板に名前を書こうとする福原先生。でもチョークがな
くてかけないらしい。

というかチョークが配置されてない教室で授業ってどうやってやる
んだろう………。

「それではみなさんにも自己紹介をしてもらいましょうか。廊下側
の人からお願いします」

これまた初日の定番だ。そして廊下側の席についている人から自己紹介が始まっていた。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる」

お、秀吉もFクラスなのか。木下秀吉。明久達と同じく1年の時から友達。

独特の言葉遣いに小柄な背丈、おまけに髪を肩ぐらいまで伸ばしている。見た目は誰がどう見たって美少女なのだが、性別は本人曰く男らしい。

最近第3の性別、秀吉として教師の間でも更衣室を分ける等の改革が行われたりしている。

パッと見て男だらけのこのFクラスでは俺達を癒してくれることになるのは間違いなさそうだ。

「・・・・・・・・土屋康太」

口数少なく自己紹介をするのはこれまた1年からの友達の土屋康太。通称ムッツリーニ。

青い髪に引き締まった体、おまけに自分の気配を消したりすることができるといったなかなか珍しい友人だ。

とうか去年俺の周りにいたやつのはほとんどがFクラスって……
・やっぱりみんな馬鹿だったのか……

「いやー、それにしてもさすがFクラス。女子が今まで秀吉しかないよ」

「ほんと……さすがは学年最下位クラス……」

こんなやり取りを明久としていると今度は女子の声による自己紹介が聞こえてきた。

「　　です。海外育ちで日本語は会話は問題ないけど書いたりするのは苦手です」

「お、秀吉に続く2人目の女子だね」

うん、たしかにこの声は女子の声だ。でも……この聞き覚えのある声は……

「趣味は椎名聡を死なない程度に痛みつけることです」

……。

かなり危険な趣味を持つのは、気の強そうな目とポニーテールが特徴的なドイツからの帰国子女の島田美波。

ちなみに家は隣同士で、幼馴染だったりする。

「聡、なんか大変そうだね」

「うん・・・」

まさか明久に同情される日が来るとは思っていなかった。

そして次から次へと自己紹介が終わっていき、次は明久の番になった。

立つときに何か考え事をしているように見えただけ、何か場を盛り上げる気の利いたことを言うつもりだろうか？

「　コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいな。」

『ダーリイインナー……!』

まさかの大合唱。当然だが今の段階で女子は2人しかいないため男達の、男達による、男達のための野太い大合唱。

さすがはFクラス、明久並の馬鹿が揃いも揃っている。不愉快この上ない。

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

さすがの明久も適当に作り笑顔でごまかしながら席についた。

うん、俺は場を盛り上げるとかそついうことを考えずに普通に終わらせよう。

そして俺は順番が回ってくると立ち上がって軽く自己紹介をした。

「椎名聡。好きな教科得意な教科はとくになし、嫌いな教科苦手な教科全部。部活はサッカー部。1年間よろしくお願いします」

そんなことを少し早口で喋りちゃぶ台と座布団の席に座る。

そして自己紹介はその後も続き、そろそろクラスの人の話を聞くのも飽きてきた。

なのでここで先ほど話しに出た世界的にも注目されている最先端シ

システムについても説明しよう。

ここ文月学園では科学とオカルトと偶然により完成された『試験召還システム』というシステムがある。

これはテストの点数に応じた召還獣を呼んで戦わせることができる。

基本的にテストの点数によって強さが決まるが、特殊な能力を持っていたり、召還獣の操り方で勝負が決まったりすることもある。

その召還獣でクラス単位の戦闘をして、勝ったクラスが負けたクラスより設備がボロければ交換してもいい。

それが試験召還戦争　やくして『試召戦争』だ。

「　です。よろしく」

簡単に説明も終わるとちょうど自己紹介もクラスの最後の人が丁度自己紹介を終えるところだった。

すると今度はFクラスの教室のドアが不意に開いた。

さすがはFクラス、新しい年度からいきなり遅刻をする人がいるなんて………なんてことを思いながら開いたドアの方を見てみ

る。

「あの、遅れてすみません」

『え？』

しかし、そこにいた人物はとても意外な人物だった。

第二問（後書き）

主人公・・・椎名^{シイナ} 聡^{サトシ}

・美波と幼馴染（原作と違って、美波は小学2年まで日本で暮らしていて、その後ドイツへ行ったという設定になっています）

第三問

「あの、遅れてすみません」

『え?』

ピンク色のやわらかそうな髪が背中^の辺りまで伸びていて、肌は透き通るように白い。更にスタイルは胸も含め抜群。

息を切らして胸の辺りに手を当てていて、急いできたのがわかるその姿は誰がどう見てもこの学力最低クラスの間人間じゃない。

男だらけのFクラスで異彩を放っている彼女に他のFクラスのみん

なも驚きを隠せずに行った。

そんなFクラスの中、たった1人平然さを保っていたFクラス担任
福原先生はその美少女に話しかけた。

「丁度良かったです。丁度自己紹介をしていたところなので姫路さん
もお願いします」

「あ、は、はい。姫路瑞希といいます。一年間宜しくお願いします」

ただでさえ小柄な体をさらに縮こませて声を上げる姿は彼女がまじめで、人前に出ると緊張してしまうような控えめな性格を表していた。

『はい、質問です』

そんな彼女に向けてFクラスのある男子生徒が右手を挙げた。

「あ、はいっ、な、なんですか？」

『なんでここにいますか……？』

聞きようによってはかなり失礼な質問になるのだが、これは今現在この教室で担任の福原先生以外が思っている疑問だ。

たしか姫路さんは入学後最初の試験で学年順位が一桁の成績を取っていたはず。

俺は上からより下から数えたほうが早いからあんまり上の人の順位とかは気にならないんだけど、ご覧の通り彼女のとて可憐な容姿。

興味はなくても周りの男子から話ぐらいは聞いたことがある。まあ興味がないわけないんだけどね。

そんな彼女がまさか落ちこぼれてこの学力最下位クラスまで落ちぶれるとはとても思えない。彼女ほどAクラスに行って妥当な生徒は他にいないだろう。

「そ、その……」

緊張した面持ちで体を硬くしながら言いにくそうにしている。

たしかに誰もが同じことを思って彼女のことをじっと見たら、姫路さんの性格じゃ言いづらくなって当然だ。

「振り分け試験の最中に、熱が出てしまいました……」

その言葉を聞き、俺を含めFクラスの生徒40人以上が『ああ、な

るほど』といわんばかりにうなずいた。

そういえば試験途中での退席は0点扱いになるんだっけか。まあA
クラス行きがほぼ決定していた彼女にとってはとても不幸な話だな
・
・
・

「で、では、一年間よろしくお願いします」

若干クラスの空気に押されながらも姫路さんは自己紹介を終えて、
空いている席、明久の前の席に安堵の表情を浮かべながら腰を下ろ
していた。

俺と明久は隣同士のため、右斜め前という席になる。黒板を見ると
彼女の頭が見えるのか……うん、悪くはない。

せっかく席も近いんだし、話しかけてみようかな？

いや、でも明久辺りが先に話しかけそうな気がするな。

「あのお、姫路さ」「姫路」「

「はいっ、な、なんですか？えーっと……」

予想通り明久が話しかけたが、その声に覆いかぶさるように雄二が姫路さんに話しかけた。

「坂本だ。坂本雄二、一年間よろしく頼む」

うん、雄二が話しかけたし俺もこの際だから自己紹介ぐらいはしておこう。

「久しぶり姫路さ、俺は椎名聡。一年間よろしく、姫路さん」「

「あ、はい、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

そういつて丁寧に頭を下げてくれた。挨拶も丁寧だし、結構お嬢様育ちなのかな？

とつか明久の声に被さった気がするけどまあ良いか。

「まあ良いかじゃないよ！」

「うえ、なんだよ、明久！」

明久がそう掴みかかってきた。仕方ないだろ。お前はそういつキヤラなんだから。

「よ、吉井君!？」

姫路さんは明久に気づくと、驚きの声を上げた。

ひよっとして知り合いだっただとか? 場合によっては明久のことを少々痛みつけないといけなくなるけど……。

あ、でも今明久の顔を見て声を上げたな。多分これはきつと

「「姫路^{さん}、明久が不細工ですまん(ごめんね)」

うん、きっと雄二も同じことを考えてると思ってたよ。

「そ、そんな、目もパツチリしているし、顔のラインも綺麗だし、全然不細工じゃないと思います！むしろ……その……」

「まあたしかにそこまで不細工ってわけでもないな。馬鹿じゃなきゃもうちよつとモテたかもな」

「だから聡だけには馬鹿って言われたくないよ！」

「はい、その人達、静かにしてください」

担任の福原先生が教卓をパンパンと2回ほど叩いて、こちらに注意をした。

そしてその2秒後。バキバキツという音とともに教卓が再びゴミ屑と化した。

別に強く叩いてるわけでもないのに崩れてしまうなんて……
なんてボロいクラスなんだろう。そう再確認する機会が多すぎて困ってしまう。

「え………替えを取ってきますので皆さんは自習していてくだ

さい」

気まずそうにそう告げると、先生は足早に教室から出て行った。

第四問（前書き）

主人公は自分のことには鈍感ですが、他の人のことに関してはなかなか鋭いです。

第四問

年度初日から異例の自習。

でもさすがはFクラス。まじめに机に勉強道具を開いているものは誰一人としていない。

携帯式ゲーム機をしてる生徒もいれば居眠りをしている生徒もいる。なんだか覆面を被っていたいかにも怪しい組織のような格好で縄をいじっている生徒は見なかったことにしよう。

「雄二、ちょっと話があるんだけど」

「ん？なんだ？」

「1111じゃ話しづらいから廊下で」

「……明久、言っておくが俺は男同士の恋愛には興味ないぞ」

「……僕ってどういう風にみんなに見られているのかな」

明久と雄二はそんなやり取りをして廊下に出て行った。

というわけで、話していたグループが2人になってしまった。んー
と、うん、さっき気になっていたことを聞いてみようかな。

「姫路さん」

「はい、なんですか？椎名君」

「姫路さんって……明久の事気になってるの？」

これはさっきの会話でなんとなく思ってたこと。なんとも思っていないなら不細工ってところを否定するだけでいいのに、最後の方にまだ何か付け足そうとしていた。多分それは明久のことを格好良いと言おうとしたのかな？

「えっ！？あ、えっと、いや、あの……その……」

顔を真っ赤にして何かを言い出そうとしている姫路さん。これはやっぱりそうなのか……。

そうと分かれれば、やらなければならないことは2つある。

1つは姫路さんを可哀想な目にあわせないこと。だから早くこの会話はなかったことにしないと。

「わかったよ、姫路さん。このことはこれ以上は聞かないから。えっと……頑張ってね?」

「あ、はい、ありがとうございます」

姫路さんは安心したのかとても可愛い笑顔で返してくれた。うん、とっても可愛い。

そしてやらなければならないことのもう1つは 明久を殺すこ

と。

「じゃあじめん、少しトイレに行ってくるね」

そう言って立ち上がり、廊下にいる標的　明久を殺りにいこうと
した。

しかし、右足にいつも受けているような関節技とともに激しい痛み
が走ってくる。

「痛あつ！、右足が曲がってはいけない方向に曲がっ……………！」

関節技をかけているのは言わずとも……………

「なんで2人でそんな楽しそうに話してるのよっ!」

「別にそんな美波には関係ないと思うんだけど……あ、だめ
!折れる!これはホントに折れるって!」

美波だ。

「お主らは相変わらずじゃのっ」

「……………」

いつの間にか席が遠かった秀吉とムツツリー二も近くに来ていた。

秀吉はいつも通りの爺言葉でそう言つとムツツリー二も美波のスカーートを覗こうとしながら、頷いている。そう、この間接技を俺はいつも食らっているのだ。

「ちょっと2人とも、そんな日常茶飯事のことのように見てないで助けてよ！」

毎日やられてるとはいえ、痛いものは痛いんだから。

「あの・・・大丈夫ですか・・・？」

姫路さんが心配そうに言ってくれた。うん、そのことだけで少し痛みが和らぐ気が

「ありがとう、姫路さん。心配してくれるだけで少し痛みが和らいだ気が　　って痛あつ・・・！美波、技を変えて、しかも強さも強めないで！」

美波が技を変えた上に威力を更にあげたためにさらに痛くなった。

「そこっ、少し静かにしてくれ」

教卓の方から注意が入った。でも教卓に立っているのは担任の福原先生ではなく・・・

「Fクラス代表の坂本だ。代表とでも坂本とでも気軽に呼んでくれ」

雄二だった。雄二が代表なのか……ますますこのFクラスのレベルの低さを思い知った気がする。

でも美波の関節技を止めてくれたことに関しては感謝しないと。

「あ、別に関節技はやめなくていいぞ」

「雄二キサマ！絶対いつか……！痛あつ……！」

殺らないといけない人物がまた一人増えた。

「それで、みんなに1つだけ聞きたいことがある」

雄二は自習中で席を移動している生徒が多い中、全員の顔を見るようにして告げた。

さすがは雄二と言ったところか、先ほどまでうるさくまとまりのなかったFクラスが、雄二に視線を合わせている。

「かび臭い教室。古く汚れた座布団。今にも壊れそうなちゃぶ台」

Fクラスのほとんどの人物が雄二の言うことにあわせて、それらの備品を順番にそって眺めていた。

「……不満はないか？」

「『大ありだー！』」

Fクラスほぼ全員による叫び声。50人中47人が男子というこのクラスでの一体感になったときは恐ろしいものになると思う。

姫路さんや秀吉はもちろん、あの美波でさえ少し驚くほどだ。

しかし雄二はその声を待っていましたといわんばかりに、不敵な笑みを浮かべていた。

「ということで、これはFクラス代表としての意見だが、俺達Fクラスは Aクラスに試召戦争をしようと思う」

その雄二の一言でクラスからはさまざまな声が上がっている。

『俺達で勝てるのか？』

『これ以上設備を落とされるのは嫌だ』

『無理に決まっている』

皆がそういうのも無理はない。たしかにFクラスとAクラスの戦力差は歴然としている。

Aクラス1人に対しFクラス3人でやっとな抵抗できる程度。相手次第では5人いてもあっさりやられてしまう。なんてことも。

だが、このクラスの代表は雄二だ。きっと何か皆をやる気にさせる作戦を立てているはず。

たしかに学力はいくら代表といえども、Fクラスになってしまふのだから、良いとはいえない。

でも雄二は悪知恵がとても優れている。何度ヤツに裏切られたことか。

「そんなことはない。必ず勝てる」

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『どんな根拠があつてそんなことを』

するとクラス中から驚きの声が上がっている。もちろん否定的な意見ばかりなのは仕方ないけども。

「このクラスには試召戦争で勝てることができるほど戦力が揃っている。それを今から説明しよう」

すると雄二は再び不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろしている。

「康太。姫路のスカートを覗いていないで話を聞け」

「は、はわっ」

雄二に言われてようやく覗かれていたのに気づいた姫路さんはあたふたしていた。そういう仕草一つ一つが可愛らしすぎる。それに比べて……

67

「何か失礼なこと考えてない？」

「……なんでもない」

美波の方を見るとそう返されてしまった。こういつ時だけ勘が鋭い。

「土屋康太。こいつがあ有名なムツツリーニだ」

「……………(ブンブン)」

するとムツツリーニはブンブンと顔を左右に振ってお得意の否定のポーズを取る。だがムツツリーニ。顔に畳の跡が付いているからもう隠すこともないと思うんだけど。

『ムツツリーニ……………だと?』

『まさか、やつがそつだといつのか?』

『だが見てみる。あそこまで明らかかな証拠を隠そうとしているぞ』

クラスからも驚きの声が上がっている。というのも土屋康太という本名はあまり有名ではない。無口だし。

でもムツツリーニという名は別だ。その名は男子生徒にとっては畏怖と畏敬を与えている。

「??.?」

一方、姫路さんは頭にいくつか?マークを浮かべている。ムツツリーニのあだ名の意味がわからないのかな?土屋康太とムツツリーニなんて1文字もあってないし。

でも世の中知らなかったほうが幸せなんてことばかりだ。その由来が『ムツツリスケベ』だということは教えないほうが良いだろう。

「姫路のことは説明するまでもない。このFクラス最大の戦力だ」

すると雄二が今度は姫路さんを例に挙げる。

たしかに元々Aクラス行きだった生徒が1人いるだけで、クラス全体の士気も高まるだろうし、おまけに美少女というレツカルを貼ればもう申し分ないほどのFクラスの主戦力になる。

『そつだ、俺達には姫路さんがいる！』

『彼女ならAクラスにも引けを取らない』

『姫路さんさえいればもう何もいらぬ』

なんだろう。熱烈なラブコールを送っている男子生徒が1人いる気がするのだが。

「木下秀吉だっている」

「いや、ワシは勉強はそんなにできんのじゃが……」

秀吉はそう言っている通り、勉強方面では俺や明久とそこまで変わらない。

でも演劇部のホープや双子のお姉さんのこととか、または男子という戸籍ながらも女子でさえも憧れる可愛さ。

『おお………』

『アイツか、木下優子の………』

更にFクラスの士気が高まっていく。

「もちろん、俺だって全力を尽くすぞ」

そう言って雄二は自信満々に親指を自分の胸の方を指しながら言った。

『確かに何かやってくれそうやつだ!』

『坂本って小学校の頃神童とか呼ばれていなかったか?』

『じゃあ振り分け試験の時は体調不良だったのか』

『Aクラスレベルが2人もいるってことだよな!』

今日最高潮とも思えるほどクラスの士気が高まる。今ならこのクラスでなんでもできそうな気がする。さすがは雄二だ。

「それに椎名聡だっている」

「お、俺、か……？」

今度は俺の名前が挙がった。雄二は俺をきちんと戦力として考えていてくれたみたいだ。でもこの土気の上がっているところで出さなくてもいいような……。

『椎名聡って……サッカー部のやつか!』

『たしか2年生ながらチーム一の技術を持っているエースプレイヤーだ……』

『おお、たしかになんかやってくれそうなやつだ!』

なんというか意外だ。たしかにサッカーはまあ唯一自慢できるところだけど、みんなにこういう形で知られていたのは光栄なことだと思う。

「ああ、だがそれだけじゃない。こいつの肩書きは」

雄二が迷いのない言葉で繋ぐ。

「観察処分者だ」

その雄二の言葉を聞き、クラス全体が息を呑んだような気がした。

第五問

「観察処分者だ」

『なんだと……まさかアイツがそうだと言っのか……？』

『噂では聞いていたがまさかこんな身近にいるとは……』

『絶望した！』

クラスから驚きの声が上がっている。

「あの、それってどういっものなんですか？」

姫路さんが恐る恐る近くの席に座っていた俺に話しかける。

「えーっと、それは……その……」

どうやらAクラスに行くほどの人には縁のない話だったのか、彼女は知らないようだ。

77

「誰にでもなれるわけじゃないわ」

「成績が悪く、学習意欲に欠ける生徒にだけ与えられる特別なものじゃ」

「……バカの代名詞とも呼ばれている」

「「「まったく何の役にも立たない人のこと（よ）（じゃ）」「」」

「3人揃って悪口を言うんじゃない!!」

上から美波、秀吉、ムッツリーニ。そして最後は3人声をしっかり揃ってきた。

そんなはずはない。観察処分者とはちょっとお馬鹿な生徒に付けられる愛称だ。

「それに吉井明久だっている」

雄二が今度は戦力として明久の名前を出した。

でもなんだろう、明久が戦場で役に立つシチュエーションがまったく頭に浮かんでこない。

『誰だ吉井明久って？』

『聞いたことないぞ』

そんな声が教室の中で飛び交っている。

「雄二！ここで僕の名前を呼ぶ意味がわからないよ！せっかく士気

が高まってきたのに僕や聡の名前は才チ扱いかよ！」

「俺を明久なんかと一緒にするな！」

「僕だって聡と同じ扱いなんて耐えられないよ！」

「ちょっと黙ってる。明久も聡と同じ観察処分者だ」

この言葉を聞き再びクラスがざわめき始める。それもそうだろう、観察処分者が同じクラスに2人もいるなんてよっぽどのがないところらないだろう。

『でもたしか、観察処分者って特別な能力がなかったか？』

Fクラスの1人がそう言うと雄二がそれに続けて説明した。

「その通り、観察処分者は教師の雑用を手伝わされる代わりに、特例に物体に触れることができる」

雄二の言うとおり、一般の召喚獣は物に触ることができない。オカルトとかも絡んでいるから、簡単に言えば幽霊見たいな感じだろう。まあ見た目はどう見ても幽霊には見えないけどね。

でも観察処分者の召喚獣は違う。力仕事をさせられる代わりに物や物体に触れることができるのだ。

召喚獣の大きさはだいたい80センチぐらいでそんな幽霊が役に立つのかなんて疑問が出るかもしれないけど、まあこれも科学やオカルトが合体して召喚獣はかなりの力を持っている。

人間じゃとてもじゃないけど相手にならないほどだ。まあ一部例外な人もいるんだけど……。

「でも観察処分者って召喚獣がやられるとフィードバックで本人もダメージを受けるんじゃないかなかったかの？」

確かに秀吉の言うとおり観察処分者の召喚獣はその負担の何割かがフィードバックして帰ってくる。

例えば重い荷物を持って校舎中を歩き回ればその分の疲労が帰ってくるし、ましてや試召戦争でやられようともなれば痛みがフィードバックしてくる。

おまけに召喚獣は教師の承認がないと使えないわけだから、自分の使いたいときには出せないし、便利なようで結構きつい罰になって

いるのだ。

『それなら戦争中にあんまり出せないんじゃないか？』

その通りで、基本的に戦争に参加はしたくない。先生の雑用だけで十分だ。

「大丈夫、いざというときになれば殴ってでも戦場で戦わせるし、それにこの2人はいてもいなくても変わらないような雑魚だ」

「雄二、そこは俺達をフォローするところだよね!？」

「そつだよ!しかもさっさと恐ろしいことを聞いたよつな気がするよ!」

「とにかく、まずはDクラスを征服してみようと思う。まずは力試しと、自分達の力の証明として　な」

ものすごい勢いでスルーされた。

「というわけで観察処分者の2人で、Dクラスに宣戦布告をしてきてくれ。これはお前らにしかできない役目だ」

うん、役目をもらえるのは戦力になっていってわけだから嬉しいには嬉しいんだけど………

「下位勢力の宣戦布告の使者ってひどい目に会うよね……?」

「そんなの映画や小説の中だけの話で現実ではありえない。まあでもそこまでいうなら……姫路と島田。ちよっと来てくれ」

そう言つて雄二は姫路さんと美波を呼んでヒソヒソ声で2人に何かを吹き込んでいる。

なんだろう、まさか女子に宣戦布告をして来いなんてことはないだろうけど……？

そして2人は雄二に耳を傾けた。そして雄二が何かを吹き込んだのか、二人は顔を真っ赤にした。

「よ、吉井君、お願いがあるんですけど……」

「何、姫路さん？」

雄二に何かを吹き込まれたと思われる姫路さんは、明久の前に立って話しかけた。

「あの……宣戦布告しに行ってくれませんか……？」

姫路さん + 上目遣い「！か、かわいい。かわいすぎる……！」

上目遣いで頼むその姿を見て、Fクラスのほとんどの男子は顔を真っ赤にして、鼻血を出すものも。

そしてムツツリーニは相変わらず物凄い勢いで写真に収めていた。後で売ってもらおう。

「うん、まかせてよ！」

あんな風に姫路さんに言われたら恐らくこのクラス全員が行ってしまつたろう。でもこれは間違いなく、雄二が仕組んだんだらう。

畜生、こんなことを言われたら行かないわけには行かないじゃないか！

「さ、聡……」

「な、何？美波？」

「宣戦布告してきて……………」

美波も姫路さんと同じように上目遣いで俺に頼んできた。

美波 + 上目遣い ‖ ……

「お断りします」

俺を動かすには不十分だった。

「なんで断るのよ…」

「痛あつ・・・！、膝、が、ありえない方向に曲がって・・・！」

「宣戦布告・・・行くわよね？」

「い、嫌だ！」

「島田、そこで肘を叩いてやるよ、もっと聡は言ふぞ」

「..叩かしら？」

「い、痛あつ！雄二キサマ！痛つ・・・！ごめん、行くから！行くから、許してえ・・・！」

地獄を見た。

こうして俺と明久はまったく違った心境で宣戦布告しに行くことになった。

「騙されたあ！」

命がけでDクラスの教室から駆けて来た俺と明久。Dクラスへの宣戦布告はなんとか成功したけど、物凄い勢いで掴みかかってきた。

「やはりそう来たか」

騙されているとわからなかった明久も明久だけど、ここまで平然という雄二も雄二だ。ブチ殺したい。

「やはりってなんだよ!」

「当然だ、そんなことで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ!」

去年の春からずっとこの2人とは一緒にいるけど、この2人の仲は

よくわからない。

「それより明久。これで後戻りはできないぞ。覚悟はいいな？」

雄二が急に真剣な表情で明久に問いかける。どうやら2人は前々から試召戦争を企んでいたのか？

となるとやっぱり目的はあれ……だよな。

「ああ、いつでもいい！」

「へえ、明久がそんなにやる気なの珍しいな。姫路さんのためか？」

「な、なんでそれを!?!」

明久が慌てたよう聞き返す。どうやら間違いはなさそうだな。

「見てりゃわかるって。じゃあ俺も協力してやるよ」

姫路さんには幸せになってもらいたいし、なんだかんだ言ってこの2人はお似合いかもしれない。

「聡……うん、よろしくね!」

こうしてFクラスとDクラスの試召戦争の幕がきって落とされた。

第六問

午前の授業が終わり、昼休みが終わると俺達FクラスとDクラスの
試召戦争がついに幕を開けた。

俺は雄二の指示によって俺は中堅部隊の一応隊長つてことになって
いる。

「聡、木下達がDクラスの前衛部隊と渡り廊下で戦闘状態になつた
わ！」

「ん、了解了解」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは美波。一応同じ部隊み
たいに配属されてるみたいだ。

今現在前線にいるのは秀吉率いる先行部隊。そことFクラスの間にいるのがこの中堅部隊。

一応、役割としては先行部隊が引いてきたときに加勢することと、時間稼ぎってことだけ。

まあ一応隊長に任命されたんだし、部隊の皆に的確な指示を出さなければいけない。

まずは戦場の様子を確認しないと……

『さあこい、負け犬が！』

『鉄人！？嫌だ！補習室には行きたくない！』

『大丈夫、俺がしっかりと補習室で特別講座を行ってやる』

『やめてくれ！あれは拷問だ！』

『拷問？何をバカなことを言っている？これは立派な教育だ。趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎という理想な生徒になるまでしっかりと面倒を見てやる。安心しろ』

『ぐあーっ！やめてくれー！誰か、助け（ボタン）』

なるほどね。

「美波、俺ちょっとトイレ行ってくる」

ここは逃げるが勝ちだ！

「待ちなさいよ」

回れ右をしてトイレへと向かって試召戦争をサボろうとしたが美波に後ろ襟を捕まれた。

「な、何？美波。ちょっとトイレに」

「思考が駄々漏れなんだけど………？」

さすがは幼馴染なだけあって鋭い。

まあやるしかないってことか。ならここは隊長らしく指示でも出してみるか。

「美波、中堅部隊に通達」

「何か作戦でもあるの？」

「総員退避と　ぶほっ」

思いつき蹴りを入れられた……みぞおちに……

「良い？リユウ、ウチらの役割は木下達の前衛部隊の援護でしょう？前衛部隊が戦争で消耗した点数を補充する間、ウチらが前衛をキープするの。そんな重要な役割を逃げ出したら突破されてすぐ負けるわよ？」

美波は投げやりにそう言うてくる。

たしかに美波の言う通りだけど、いちいち急所を狙ったり関節を外すのはぜひともやめてもらいたい。

「椎名、島田、前衛が後退を始めたぞ」

するとFクラスの中堅部隊の報告部隊の1人が一応隊長である俺に報告してきた。

「よし、みんな。突撃だー！」

『『おー！』』

Fクラスの勝利のため、中堅部隊は前衛部隊と合流すべく少し走り気味で戦場に向かった。

しばらくすると、前方の方からこちらに向かってくる美少女を発見。

「聡、援護に来てくれたんじゃない！」

いつも通りの独特な言葉遣いで話しかけてくるのは秀吉だ。なんて可愛いんだろう。

「秀吉、大丈夫？」

「ああ、戦死は免れておるが、点数はだいぶ減ってしまったわい」

「そっか、じゃあ早くテストを受けなおして補充してこないと」

「そうじゃな、じゃああとはよろしく頼むぞい、聡」

秀吉は笑顔で告げると、教室の方へと走っていった。可愛すぎるよ！

「皆、秀吉があんなに頑張ったんだ！俺達も頑張ろう　　ってぐは
っ」

「ごめん足が滑った」

「足が滑ってみぞおちに蹴りが入るのは美波だけじゃないのかな！
？」

随分と機嫌の悪そうに美波が再び溝に蹴りを入れてきた。絶対わざ
とだろ・・・！！

「椎名、五十嵐先生と布施先生が引つ張られてきているようだ」

先ほど中堅部隊に報告をしてくれた男子生徒が再び状況を伝えてくれた。

試召戦争のルールは立会いの先生がいて成立する。立会いの先生の教科によって召喚できる強化の召喚獣が決まる。

だから五十嵐先生と布施先生は化学の教師だから、その教師達のフィールドで召喚すると召喚獣の強さが化学の点数で決まる。

先生が何人もいるってことは恐らくDクラスは立会人を増やして一気に蹴りをつけようとしているみたいだ。

道理で秀吉が早くに後退して来たワケだ。

「美波、化学は得意？」

「全くなし、60点台常連よ」

ぱっと聞くと60点ならそこまで悪くないような気がするけど、この学校のテストは前にも説明したように時間内無制限のテストだから、60点だと学力最低のFクラスの中でもそこまで高いほうではない。

ちなみにAクラスの人でも点数が特に高い人は400点を超えちゃうんだから、いかに60点が悪いかかわかるはずだ。

でもそんなことで弱音を吐いている余裕はない、前衛はもうほとんど突破されているからなんとかここで持ちこたえないといけない。

「とりあえずなんとしてもDクラスをこの先に通さないように、壁を作るんだ」

隊長らしく指示を送ると、みんなもその通りに動いてくれる。一応指示を出す立場だから皆から少し引いたところにいる。

「いたぞ、Fクラスだ！サモン！」

「ここは死んでも通さないぞ、サモン！」

Dクラスの数人がこちらにやってきた。サモンというのは召喚獣を

召喚するときと言つ合言葉のようなものだ。

するとその呼び声にあわせて足元に幾何学的な魔方陣が現れる。

その魔方陣の真ん中にはFと書いてあるのはその人がFクラスだということを示している。

その魔方陣から現れたのは召喚獣、試召戦争は基本的にこの召喚獣同士で戦わせるのがデフォルトだ。

「相手は数人だ、まとめていけば勝てるぞ！」

『『おおっ！』』

こうしてFクラス多数vsDクラス数人の戦闘が始まった。

「くそっ、ここは一旦退くぞ！」

Dクラスのうちの代表格生徒がそう言うと、Dクラスは後退を始めた。

いくら相手の方が点数は強くても、集団で攻めているほうが強い。

ここで一気に攻めるのもありかもしれないけど、このDクラスはおとりでFクラスのように中堅部隊がたくさん待ち受けている可能性が高い。

それにこの部隊の本当の目的は時間稼ぎ。無理して攻める必要もない。

しかしそう思っていたのもつかの間、Dクラスも俺達と同じぐらいの人数の部隊でやってきた。

そしてDクラスの子生徒の1人が五十嵐教諭を連れて、Fクラス中堅部隊の3メートルほど後ろにいた俺と美波に奇襲をしかけた。

「居ましたわお姉様！逃がしません！」

「お前は……」

「くっ、美春！やるしかないってことね……」

女子生徒の名前は清水美春、オレンジ色のような髪の縦ロールをツインテールにしている。

お姉様と呼んでいるが、美波の兄弟でも親戚でもない。もちろん学年も歳も同じ。

まあ簡単に言ってしまうえば同性愛者。変態さんだ。

「あつ！あなたは豚野郎！私のお姉様と一緒にいるなんて……許せません！」

一応1年の時同じクラスだったんだけど……本名で呼ばれた記憶があまりないのは何でだろう。

「」
「サモンっ！」

美波と清水は2人ともほぼ同時のタイミングで召喚コールをして魔法陣が現れ召喚獣が召喚された。

美波の召喚獣は軍用姿に手でサーベルを持っているところ以外は本人をそのまま少し縮小させたような感じ。まさに『デフォルトされた美波』だ。

相手である清水の召喚獣も同様にデフォルトされた本人といったところ。

「お姉様に捨てられて以来……美春はずっとこの日のことを思ってきました……」

「ちょっと！ いい加減ウチのことは諦めてよ！」

清水はプルプルを震えながら言っている。なんかドラマか何かのシーンでありそうだ。

「おい、みなみ」

「嫌です！お姉様はいつでも美春のお姉様なんです！」

「ウチは普通に男子が好きなの！」

「嘘です！お姉様は美春のことを愛しています！」

「……この2人が遠く見える……」。

「……お姉様が騙されるのもすべて悪いのは……この豚野郎が！」

そう言って美波とカビベをするのかと思ったら、何故か怒りの標的はこっちのようだった。

「聡！早く召喚を！」

「わ、わかってる！行くぞ、サモンっ！」

叫んだ直後に足元に現れる魔法陣。そして学ランに竹刀といった観察処分者の印とも言える格好をしている召喚獣が現れる。

敵の召喚獣が突っ込んできた目の前に。

「ぐはっ！」

削られる化学の点数と肩にくる激痛。観察処分者特有のフィードバックだ。というかなんで敵が突っ込んでくる目の前に召喚されるんだよ！

「美春、あのバカは放っておいて決着をつけましょう」

「わかりました、お姉様。そういうなら、あのバカ豚はあとで始末することになります」

「美波！それ見方に言う言葉なのかなっ！？」

失礼な！召喚される場所が悪かったただけなのに。

「行きます、お姉様！」

その言葉を合図にして二人の召喚獣は武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べが始まった。

「このっ！」

「負けません！」

鏢迫り合いを繰り返している二人の召喚獣。しかし時間が経つにつれて美波の召喚獣が押され始めてきた。

「美波！点数は向こうの方が高いんだから正面から当たっても勝てない！」

「そんなこと言われても……細かい動作はできないわ」

観察処分者で毎日のように先生からの雑用を受けている俺は多少召喚獣を細かく操ることができるけど、初めての試召戦争だとそこまですで細かい動作はできない。

そして直後、美波が完全に押されて、美波の召喚獣が清水の召喚獣に押し倒された。

「ここまでですっ…」

「くっ」

参考に2人の頭上にはそれぞれの試験の点数が浮かび上がってくる。

Fクラス 島田美波 VS Dクラス 清水美春

化学 53点 VS 94点

60点台とか言ってたのに50点台じゃないか、点数サバ読んでいたな？

そして刀を喉下に突きつけられる美波の召喚獣。腕や足を刺された程度ならさっきの俺みたいに点数が減るだけで済むけど、首や心臓をやられたら点数が0になってしまう。

そうなるかと鉄人による地獄の補習が待っている

「嫌あつ！補習室はいやあつ！」

取り乱すのも無理はない。こればかりはAクラスの生徒でもそう
だと思つ。

「補習室？……フフツ」

なんだか不気味な笑みを浮かべて美波の手を引っ張る清水。

でも向かっている先は補習室ではなく……保健室、かな……
……？

「ふふっ、お姉様。今ならベッド空いてますから」

「さ、聡！ちょっと助けてっ！きっと補習室より危険な場所に連れられている気がするの！」

そんなのは見ていればわかるさ。でも……

「殺します……。美春とお姉様の仲を邪魔する人は……。召喚獣だけでなく、本人を社会的にも身体的にも全ての意味で抹殺します……」

あの殺気を止められる気はしないんだ……

「美波、お幸せに！」

「聡！なんで認めるのよっ！」

「多分美波のことは忘れないよ！」

「なんで別れのセリフなのっ！？しかも多分ってなによ！？」

「邪魔者は……殺します！」

すると今度は敵の召喚獣がこちらの方へやってきた。やばい！召喚獣がやられるだけじゃ済まされないような気がするよ！

「椎名、危ない！サモンツ！」

脇から割り込んできたこの声はFクラスの須川。君はきっと救世主だ！

Fクラス 須川亮 VS Dクラス 清水美春

化学 76点 VS 40点

どうやら清水の召喚獣は美波との戦闘で点数を多少失っていたみたいだ。須川の召喚獣が清水の召喚獣を斬り倒した。

「島田、大丈夫か？」

「ありがとう須川。鉄じ 西村先生、早くこの危険人物を補習室へとお願ひしますー！」

「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ」

「お姉様！美春は諦めませんから！このまま無事でいられるとは思わないでくださいね！」

とても危険な捨て台詞を残して、点数を失った清水は鉄人に補習室へと連行された。

色々な意味で危険な戦いだった。これが試召戦争か……

「聡」

「美波、化学の点数だいが減ってるみたいだから、一度戻ってテストを受けてきたほうがいいぞ」

「聡」

「須川、君は今日俺の中じゃ MVP だ！でも油断しちゃいけない。まだまだ戦争は始まったばかりだ」

「聡ッ！」

「はひいッ!？」

「ウチを見捨てたわね？」

トレードマークのポニーテールをしているリボンが鬼の角に見えた。恐ろしいほどの殺気が感じられる……。

「きつと人違いかと　　って違っ！脊椎が今だ経験したことのない曲がり方をしている！？須川！助けてくれ！」

「須川……アンタにはさっき助けてもらったけどどこかで邪魔したら命の保障はないわよ……？」

美波が殺気を浮かべながらかつ、とても笑顔で言った。須川、ここはお前の男を見せるときだ！

「椎名、生きて再会できることを願っている」

「待つんだ須川！見捨てないで！

ってぶはあっ！脊椎があああ

第七問

「椎名！横溝がやられた、布施先生側は残り2人だ！」

「五十嵐先生側、俺一人しかいない、援軍頼む！」

「藤堂の召喚獣がやられそうだ。助けてくれ！」

美波からの制裁を受けているとかなりの劣勢になっていた。

雄二に援軍を求めたいけど、そうすると作戦が崩れてしまう。ここはこの人数で乗り切るしかない。

「とりあえず防御に専念しよう。藤堂はできたら助けたいけど助け

よつとして自分がやられちゃ埒が明かないから諦めろつもりで！」

「了解！」

「クラスめ、明らかに時間稼ぎが狙いだな、何を企んでいるんだ！」

「どうやらDクラス代表にはすでにこちらの作戦が見切られているよ
うだ。」

「大変だ、Fクラスに世界史の田中が呼び出されたようだ」

「世界史の田中だと！？」

Dクラスの偵察部隊が代表のところに報告している。

くそっ、田中教諭も見つかったか。田中教諭はおっとりとした初老の先生で、採点の甘さには定評がある。

でも初老でおっとりしているのがネックなところで採点のスピードは他の先生と比べてかなり遅い。

長期戦では都合の良い先生だけど、これでDクラスに完全に策がバシっちゃったし、恐らく対策を打ってくるだろう。

「椎名、Dクラスは数学の木内を連れ出したみたいだ」

数学の木内教諭は田中教諭とは正反対で、採点は厳しいけど、数学

の先生ということでは採点のスピードは他の先生と比べてかなり早い。

さてはDクラス、一気にけりをつけるつもりだな。

でもそうすると尚更、戦いにくくなってくる。個人のレベルは相手の方が上だし、こちらの中堅部隊も段々と減らされてきている。

「聡!」

すると後衛の方から我らがFクラス代表、雄二の声が飛んできた。

「あともう少し耐えてくれ!」

「ああ、わかった！まかせろ！」

「いたぞ、坂本だ！」

「狙え！代表を落としてしまえばこちらの勝ちだ！」

やってきたDクラスはどうかやら代表である雄二しか見えていないらしい。

「ここにもFクラスは居るんだぜ？」

Dクラスの一人が突っ込んできたのを見て足をかけて転ばせた。そして転んだ召喚獣はFクラスの群れの餌食となった。

「戦死者は補習！」

鉄人が登場し戦死したDクラスの生徒を担いで補習室へと向かった。

「油断するな！まとまって行くんだ！」

「じっくり相手が見つ込んでくるのを待つんだ！なるべくまとまるようにして！」

お互いの指揮官の指揮が飛び交う。

思わず息を呑むような接戦がしばらく続いた。

「どうしたこれまでか？Fクラスさん？」

「くっ」

時間が経つに連れて段々と押されてきた。しかしまだ雄二達の援軍は来ない。

仕方ない……ここは一か八かだ！

「あ！霧島さんのスカートが捲れてる！」

『なにに！？』

Dクラスの背後の方を指差しながら叫んだ。するとDクラスの男子だけでなく、Dクラスの女子、Fクラスの男子もが指差したほうを向いた。

さすがは学年主席で才色兼備の霧島翔子さん。

でも女子の皆さん、せっかく共学の高校なんだから男子にも興味を持って。

たしかに霧島さんは男子よりも女子の方が好きっていう噂も聞いたことがあるけど。

そんなことを思いながら、壁に備え付けられている消火器を掴み取り、安全弁を勢いよく引き抜く。

ブシャアアア

景気の良い音と共に溢れ出る消化薬の粉末。

『うわっ！なんだこれ?!』

『前が見えない!』

「美波！なんてことを!」

視界は封じたし、美波は今回復試験を受けているから大丈夫、バレなきゃいい。さっきのお返しっことで。

『Fクラスの島田め！なんて卑怯なマネを！』

『許せねえ！彼女にしたいくない女ランキングに載せてやる！』

・・・バレないよ。うん、絶対バレないよ、ね・・・？

「待たせたな椎名！五十嵐先生。Fクラス近藤行きます！」

そんな不安を考えていると、後ろから先ほどまで前線で戦っていた前衛部隊が回復試験を終えてやってきた。

「くっ、ここは一旦退散だ！」

Dクラスの部隊長からの指示が聞こえる。それと同時にチャイムが鳴る。これは授業が終わり、放課後の始まりを告げるチャイム。

でも試召戦争はもちろん引き分けなんて形になるわけでもなく、このまま続く。

Dクラス以外の教室からは続々と、帰宅する生徒や、部活に行く生徒で、みんな教室を後にして、廊下にはかなりの人が溢れている。

これでやっと中堅部隊の役目は一応一通り果たすことができたこと

になる。

「聡、作戦を実行するぞ。お前もFクラス初陣の勝利の瞬間みたいだろ？」

「当たり前だ」

そして雄二を含めるFクラス数人は下校する生徒の人混みをつまく利用してDクラスへと向かった。

「もう下校時刻だ、そろそろ終わりにしないか？」

「Fクラス代表……わざわざ探す手間が省けたな。ここで決着をつけてやる！」

Dクラス前にたどり着くと、さっそく代表同士がお互いを探り合っている。

Dクラス代表の平賀だっけ？その代表の周りには近衛部隊が、そしてFクラス代表 雄二の周りにも俺を含めて近衛部隊が数人いる。

ここで決着をつけるにはあまりにも不利だ。

だってDクラスの教室前なんだから長期戦になればすぐに戦力が足されるし、数がほぼ同数なんだから、普通に点数の高いDクラスの方が有利だ。

そこで雄二の作戦が生きてくる。そもそも何故時間稼ぎをしていたのか。

まあ理由の1つは今の状況を作るため。下校時刻になり廊下に生徒が溢ればこうしてDクラス前まですんなりといける。

そしてもう1つは

「行くぞ！サモンッ！」

「Dクラス笹島受けます！サモンッ！」

Fクラス 椎名聡 VS Dクラス 笹島圭吾

化学 43点 VS 99点

点数でいえばダブルスコアほど負けている。隣でも秀吉や須川などがそれぞれ近衛部隊と1vs1で召喚戦争をしている。

でもこれでDクラス代表にくっついてを守る近衛部隊はいなくなつた。

「あ、あの……」

「え？あ、姫路さんどうしたの？Aクラスはこの廊下通らなかつたと思つけど」

Dクラス代表の後ろに立っている姫路さん、これがもう1つの作戦だ。

姫路さんは元々Aクラス次席の実力を持っている。だからつまりみんなはAクラスに行くと思っている。

そこでAクラスの廊下あたりからDクラスへ下校中のように見せかけて移動してもらった。

まあAクラスは下校するときここは通らないんだけど、放課後や休み時間に通る分には別に何の違和感もない。

Dクラスは姫路さんがFクラスだということなんて知らないだろうから、当然誰も警戒しない。

「Fクラスの姫路瑞希です。よろしく願いします」

「あ、こちらこそ」

Dクラス代表はなんだか話が掴めないのか恐る恐るといった感じで答えた。

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「えっと、サモンですっ」

Fクラス 姫路瑞希 VS Dクラス 平賀源二

現代国語 399点 VS 129点

「え？あ？あれ？」

戸惑いながらも召喚獣を召喚し、相対させる。しかし相手になるはずがない。

なんていったってAクラス並の実力があるんだし、召喚獣の装備も見るからに強そうだ。

「じゃあ・・・その・・・じゅめんなさい！」

姫路さんは召喚獣に攻撃指示を出し、相手の反撃も受けずに一撃でDクラス代表を下して、この試召戦争はFクラスの勝利で幕を閉じた。

第八問

Dクラス代表、平賀源二。討死

『『うおおーっ！』』

その知らせを聞くとFクラスからは歓喜の雄たけび、Dクラスからは女子の悲鳴が混ざるような大音響が校舎中に響き渡った。

『凄え！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台とはお別れだ！』

『ああ。Dクラスの施設が俺達のものになるんだから！』

Fクラスの男子の一部がこういった会話を繰り返している。

『坂本はやっぱりすごいやつだったんだな』

『ああ、坂本サマサマだ！』

『坂本の作戦も完璧だったけどやっぱり俺は姫路さんだ！』

たしかにこの勝利は雄二の作戦と姫路さんがいたからだったと思う。

そんな興奮状態のFクラスの中で一人がくっとうなだれているDク

ラス代表があった。

代表というのは、勝てば雄二みたいにみんなから英雄として称えられるが、負ければその逆で責任を押し付けられる。

ましてや2ランクも格下のクラスに負けたんだから、多くのDクラス生徒から批判を受けるのだろう。

なんていうか、可哀想だ。戦争で負ければ3ヶ月間宣戦布告することとはできない。つまりはDクラスは3ヶ月間、このボロボロのFクラスで過ごすことになる。

「あの、その……さっきはすいませんでした」

そんなDクラス代表に姫路さんがオドオドと話しかける。

「いや、謝ることはない。Fクラスを甘く見ていた俺達が悪かったんだ」

一応これは戦争だ。姫路さんが謝ることはないんだけど、そこら辺はさすが姫路さんと言ったところかな？

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ今日はもうこんな時間だし作業は明日でも構わないか？」

たしかに作戦のために時間稼ぎをしていて、空は薄いオレンジ色のような、綺麗な夕焼けだった。

今から設備の交換とかをしていたら、あっという間に日が沈んでし

まいそつだ。

「いや、その必要はない」

雄二は予想外の答えを見せた。

「え？なんでだよ、雄二」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

当然のように告げる雄二。雄二は何を言いたいのかさっぱりわからない。

「それってどついでと？」

「忘れたのか？俺達の目標はAクラスだ」

打倒Aクラス・・・それは今のFクラスの目標というか野望だ。
Aクラス以外の教室の設備には興味がないってこと？でもそれなら
・・・

「でもそれならなんで標的をAクラスじゃなくてDクラスにしたの
？」

「少しは考えてからものを言え。まずはそれからだ」

考えてからものを言えって言われても・・・Dクラスに勝つこ

とでFクラスに得になるものって……

「あ、わかった！自信をつけさせて景気をつけるため、とか？」

「おー、お前にしてはよくできたな」

「どんだけバカだと思われてんだ……」。

「でも他にも目的はある。おい、Dクラス代表。今から言う条件を聞いてくれれば教室設備の交換はなしにしてやる」

「……それは願ってもないチャンスだが、条件はなんだ？」

「大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるエアコンの室外機を動かさなくして欲しい」

雄二が指示を出したのはDクラスの窓の外にあるエアコンの室外機。

でも元々これはDクラスの私物じゃない。

少し貧しいぐらいの教室設備のDクラスにエアコンがあるわけでもなく、Dクラスの窓の外に置いてあるのはとあるクラスのエアコンの室外機だ。多分スペースの関係だろう。

「Bクラスの室外機か」

「それを壊すんだから、先生から睨まれるというリスクもなくてはな

いが、このボロボロなFクラスで3ヶ月過ごすよりはよっぽど良い条件だろ？」

たしかにうまく事故に見せかければ、教師からは嚴重注意で済む。

このFクラスで過ごすよりはよっぽど良い取引だと思う。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、何故そんなことを？」

「なーに、大したことじゃないさ。次のBクラス戦に必要なんだ」

「……そうか。ではありがたくその条件を呑ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

「ありがとう。Fクラスの反乱がうまくいくことを願っているよ」

「はは、うまくいくなんて思っちゃいないだろ？」

「そりゃそうだ。Aクラスは怪物揃いだからFクラスが勝てるなんて思うほどめでたい頭はしじゃない。まあ社交辞令ってやつだ」

そう言って、手を挙げてFクラスを去っていくDクラス代表。その表情は先ほどまでとは打って変わって爽やかだった。

「さて、皆。今日はご苦労だった。明日は消費した点数の補給を行

うから、今日は帰ってゆっくり休んでくれ。じゃあ解散」

雄二がそう言って、締めるとみんな試召戦争に勝ったという満足気な顔をして、カバンを持ってそれぞれ帰宅して行った。

俺も、勝てたという充実感はかなり大きい。

けれども、その分疲労も結構溜まっている。

ましてや観察処分者でフィードバックもだいぶ受けたからね。

まあ、でも、ね。

「秀吉、ムツツリーニ、明久！どっか寄って行こうぜ！」

「お、良いね！聡の奢りで！」

「……うん」

「お主ら……代表の言ったこと聞いておらんかったのか？」

秀吉は釣れないなあ。そういう日こそ寄り道して帰らないと！

「じゃあ秀吉の奢りってことで！」

「ワシは行くともなんとも行っていないのじゃが……それより
聡よ、お主何か忘れておらんか？」

「ん？なんか忘れてたっけ？」

今日は部活もないし、特に大した用事もない。

別に何も忘れていないはずだけど……？

「聡！」

「ん？どうしたの？美波」

美波に呼ばれて振り向くと、視界に入ってきたのは美波……の蹴り上げた右足だった。

「痛たたた……」

「よくも消火器のいたずらの犯人をウチに仕立て上げてくれたわね……おかげで彼女にしたいくない女子ランキングが上がったじゃない！」

「あはは、それはきつと人違いだね　だめだ！その間接はそつちには曲がらない！痛あつ！これはまじめに死ぬって！ぐあああーっ！」

秀吉から翌日に聞いた話だと、この後美波は返り血が服についてしまつて取るのに苦労したらしい。

第九問（前書き）

Bクラス代表の根本の設定が、原作と結構変わってきています。

第九問

Dクラスとの激戦を制した翌日。

Fクラスは総合科目のテストの補充を午前の授業目一杯に使って行った。

「さて、皆。テストご苦労だった。午後はBクラスとの試召戦争に突入するつもりだが」

代表である雄二が教壇に立ち皆の方を向きながら話している。

「殺る気は充分か？」

『『おーっ！』』

雄二の問いに声を合わせるFクラス。

男子が9割以上を含むこの教室がひとつになったときの一体感は凄
いと思う。ある意味このクラスの武器といえる。

「とうわけで、明久、聡。いつも通り宣戦ふこ」

「断るっ！」

「まだ全部言い切っていないんだが……」

何を言っている。昨日の今日で忘れてるとでも思ったのか。

「いくらなんでも昨日の今日でバカな明久が忘れるわけないだろ！」

「そつだ！このバカ聡が覚えているぐらいだ！」

「わかったわかった。じゃあ多数決にしないか？」

多数決……か。美波の関節技を喰らって無理矢理行かせられるよりはまだ行かなくてもいい可能性もあるかな？

クラスの中には宣戦布告とかいう仕事は代表がやるべきとかいう意見もあるだろうし。

それに、万が一雄二に票が集まらなくても、俺より明久の票の方が絶対多いはず。それなら行かなくて済む。

「いいよ、その提案受けてやる！」

「ふっ、じゃあ決まりだな。俺と聡と明久。この3人の中から、宣戦布告に行くのに適任だと思うやつを1人選んで手を挙げてくれ」

そして雄二が仕切って雄二、明久、そして俺という順番に表を数えた。

結果は

・坂本雄二 2票

・吉井明久 24票

・椎名聡 24票

「
「
・
・
・
・
」
」

納得いかない。

なんで雄二の票が俺と明久だけの2票なんだ。しかもなんで綺麗に俺と明久の票が同数なんだ。

「とうとうわけだ。とっとうつって来い」

「ちょっと待て雄二！これはどう見ても仕組んだらろ！」

「そつだよ雄二！これはいくらなんでもおかしいよ！」

「安心しろ。宣戦布告と言ってもDクラスの時みたいなきことは起こりやしないさ」

なんだろう。雄二が言つと全部嘘のように思えてくる。そんなぐらいいこいつに対しての信頼度が下がってる。

「そんなの信用できないよ！」

明久も俺と同じみたいだ。

「まあでも、投票で決まったんだ。グダグダ言っていないで行って来い」

「そうよ、とっとうと行ってきなさいよ」

美波もそう言うてくる。ぐっ、まずい。早く行かないと痺れを切らして関節技をかけてきそうな気がする。

それに、一応投票で決まったんだし。美波に関節技をかけられていくよりは納得できるか。

「じゃあ仕方ない。明久行くか」

「うん……仕方ないね」

そして俺と明久はFクラスを後にして次の対戦相手、Bクラスの教室へと向かった。

「ここがBクラスか……」

「Fクラスと比べたらとても同じ学校にある教室とは思えないよね」

Aクラスの真正面にあるBクラス。

正面にあるAクラスが立派過ぎるせいか、パツと見た感じだとそこまで凄くは感じないけど、Fクラスと比べたらその差は歴然。

多分、結構有名な私立高校ぐらいの設備は揃っているんじゃないかな？

「じゃあ行くか」

そう言っつて横開きのドアに手をかける。すると横から話しかけられた。

「椎名、どうしたんだ？Fクラスのお前はこんなところに用はないだろ。まさか教室を間違えたとか？」

「……根本」

話かけてきたのは、根本恭二。

雄二と同じかそれより少し低いぐらいの身長だから結構高いほうだ。

同じサッカー部でサッカーの実力は多分俺の次にうまいと言われている。

実力は十分に認めるけど、それとは裏腹に先輩や顧問の先生に媚を売っていたり、テストではカンニング疑惑があったりと、何かと評判が悪い。

実際、自分より格上とされている俺が気に入らないのか、事あるごとにつつかかってくるやつだ。

「お前には用はない。Bクラス代表に用があるんだ」

「Bクラスにだって？まさかお前等、Dクラスに勝った程度で調子乗って今度はBクラス攻めようとも考えてるのか？さすがは最下位Fクラス。おめでたい頭のやつばっかだな」

「なんだとー！」

根本の挑発に明久が怒って殴りかかろうとする。

俺はそれを左手で明久の前に出して止めた。

「聡……」

「お前には関係ないってことだ。行くぞ、明久」

「待てよ。Bクラス代表に用があるんだろ？」

「なんだよ？」

根本が再びつつかってくる。

まったく、本当に面倒くさい野郎だ。

「俺がBクラス代表だぞ」

「何……だと？」

根本は自分の胸に親指を突き立てながら、不敵に笑っていた。

カンニングしてるって聞いてたからAクラスかと思っていたが、Bクラスだったのか。

代表ってことは狙ってあえてBクラスにしたってことか……？

「宣戦布告するのかい？最低クラス。まあ半日もあれば簡単に倒してやるけどな」

「ふん、良いぜ。宣戦布告だ！絶対ぶっ飛ばす！」

「じゃあ昼休みが終わった午後の授業から戦争開始だ。楽しみにしてるよ」

根本はケラケラと声を上げて笑いながら、Bクラスへと入っていった。

面白くなってきた。Bクラス、絶対倒す！

第十問

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが校舎中に響き渡る。これでBクラス戦、開戦だ。

「よし、行って来い！目指すはシステムディスクだ！！」

『『おおーっ！！！！』』

雄二の掛け声に応えて、いつせいに走り出す我等がFクラス。

さて、俺も根本のヤツに一発かましてやるか！

「待て、聡。お前は今日は教室で俺の護衛だ」

そして、勢い良くBクラスへと向かおうとしたら、いきなり雄二に出鼻を挫かれた。

「今日はいつにもなくやる気があるんだ！行かせてくれ！」

「Bクラス代表は根本だろ？アイツはどんな卑怯なマネをしてくるかわからない。だからお前にしかできない役目を頼みたいんだが」

その後、俺は雄二からある作戦を任されて、とあるものを受け取った。

〈明久Side〉

Bクラス戦の作戦はとりあえずまずは相手を教室の中に押し込むこと。だから点数とか何よりも、最初の勢いが大切になってくる。

今回のこちらの主力は数学。Bクラスは文系生徒が多いらしい。

それに数学の先生は採点も早いし、前のDクラスが使っていた作戦のように一気に蹴りをつけたときに有利だ。

『いたぞ、Bクラスだ!』

『高橋先生を連れてくるぞ!』

正面を見るとこちらとは打って変わってゆっくりと歩いているBクラスの前衛部隊の姿があった。

人数は10人程度。それに対してこちらは30人以上の塊で来ているんだから、押せないことはないだろう。

『『『サモンツ―!』』』

そして召喚の合図を出して、本格的にBクラス戦が始まった。

Bクラス 野中長男 VS Fクラス 近藤吉宗

総合 1943点 VS 764点

Bクラス 金田一祐子 VS Fクラス 武藤啓太

数学 159点 VS 69点

Bクラス 佐藤真由子 VS Fクラス 君島博

物理 152点 VS 77点

数では勝っているけど、個人個人だと相手とは倍以上の差がある。

「みんななるべく固まって！きちんとフォローを！」

「お、遅れ、まし、た……。」

指示を出していると後ろの方から姫路さんが息を切らしてやってきた。

体があんまり丈夫じゃない姫路さんは男子の全力疾走に着いて来れないだろう。でも一生懸命走ってきてくれた。

男としては無理をさせるわけには行かない。

でも今のまとまりのない状況では彼女の力がどうしても必要になる。

『いたぞ！姫路瑞希だ！』

Bクラスの誰かがそう叫ぶとBクラスの生徒の顔つきが変わった。随分とマークされてるみたいだ。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」

「はい、行ってきます」

そう言っつて戦場へと流れ込む姫路さん。

男なのに・・・頼っつてばかりでごめん。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学対決を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路です。よろしくお願いします」

早速勝負を申し込まれる姫路さん。相手としては一番やっかいな人物だろうし、先に潰しておきたいんだらうか。

「律子、私も手伝う！」

後ろから更にもう一人、Bクラス女子が召喚獣を召喚した。

10人ぐらいしか来てないのに、2人でマークするってことは相当警戒してるんだろう。

「明久！何ボーっとしておるのじゃ」

秀吉に話しかけられて我に帰る。いけないいけない。

姫路さんの見学をしている場合じゃない、今は試召戦争だ。

「じめん、秀吉。今行くよ！」

僕もクラスや姫路さんのために戦わないと！

「中堅部隊と入れ替わりながら後退するのじゃ！戦死だけはするでない！」

あの後、姫路さんはBクラスを2人を倒し、こちらの士気は急上昇して前衛を突破したんだけど、中堅部隊にかなりの人数を配置していて、少し押され始めてきた。

FクラスとBクラスの差は100点ぐらいあって、まさに桁が違っている。

そのため、同数程度なら簡単に押し返されてしまう。

でも今日の作戦は相手を教室の中に閉じ込めないと何も始まらない。
ここはなんとか押せるような作戦があればいいんだけど……

「……明久」

「ムッツリーニ、どうかした？」

全身に黒タイツを纏っているムッツリーニが話しかけてきた。

何故だろう、その格好にまったく違和感がない。

「……これ、聡が。いざという時に使えって」

そして僕はムツツリーニから指令書と書かれた封筒を一通受け取った。

中には1枚の紙が入っていた。

「コレは……」

「みんな、よく聞け！」

Fクラスの前衛部隊全員に聞こえるように大きな声で話す。多少Bクラスに聞かれてしまっているけど、あまり関係はないから大丈夫だ。

「Bクラス代表の根本には、ガールフレンドがいるぞ！」

『『『『『なにiiiiiiii!?!?』』』』』』

反応する我らがFクラスの異端審問会メンバー達。

「相手はCクラス代表、小山友香さんだ！」

簡単に言えば、彼女がいたり、モテたりする男子に対しては、鉄人の鬼の補習などお構いなしに、相手を殺そうとする。

それが、我らがFクラス。異端審問会、別名FFF団だ！

『ゆる〜さん〜』

『貴様等に独り身の辛さがわ〜か〜る〜か〜』

異端審問会名誉会長である須川君を筆頭に、覆面に釜という完全な死神スタイルで、塊のようにBクラスへと突撃していく。

『何だアイツ等！危険だ、全力で防御しろ！』

そんなBクラスの指示が飛び交っているけど、FFF団はそんなのお構いなしに、塊になって次々とBクラスメンバーを倒している。

そして、Bクラス前まで到達したところで、FFF団は点数が削られ、みんな揃って鉄人の補習になった。

「明久、ワシは教室へ一旦戻るぞ」

異端審問会の活躍でBクラス前まで攻め込めて、これから一気にたたみかけようかというこの時に、秀吉はそう言った。なんでだろう？

今日は30人以上が前衛部隊としてかりだされているので、たしかに本陣の守りは手薄かもしれないけど。

「ん？なんで？」

「Bクラスの代表は、根本なんじゃろ？」

「うん、宣戦布告しに行ったときそつって言ってたけど？」

「根本といえは、カンニングの常連とか、色々と悪い噂があるじゃろ、念のために戻っておいたほうがいいかと思うて」

秀吉の言う通りで、たしかに根本君は評判がよくない。宣戦布告しに行ったときも聡と何か言い争っていたし。

「なるほど、念のため戻っておいたほうがいいかもしれないね」

「そうじゃ」

そして姫路さんに一言断りを入れて、僕と秀吉はFクラスへと向かった。

〈聡Side〉

『Fクラス代表はいるか?』

Bクラス戦が始まって暫く経つと、Fクラスに一人の男子生徒が尋ねてきた。

多分今たずねてくるというのは恐らく彼はBクラスだろう。

「俺だが何か用か?」

『代表から話があるそうだ。協定を結びたいらしい』

「わかった、今行く。」 聡、ここは任せたぞ」

「ああ、任された」

そう言うと雄二は立ち上がり、教室にいた近衛部隊を連れて空き教室へと向かった。

暫くすると、廊下から誰かが歩く音が聞こえてきた。そして俺は一旦教壇のわずかなスペースへと身を隠す。

『よしよし、Fクラスのやつ。誰もいないぜ』

『ホント、バカな連中だな。じゃあとつととやっちまつか』

聞こえてきたのは、二人の男子の会話。

この会話からして・・・恐らくBクラス。

『ああ、それにしても根本はよく考えてるよな、代表と協定を結んでいる間にFクラスを補給もできないほどにボロボロにしようだななんて』

『まっただくだなあ』

ふん。やっぱりね。

そして相手側にこちらの存在が気づかれないように、そっとあっちの方を見る。

すると、その2人のうちの一人がカッターナイフを取り出して、刃を出していた。

そして一番廊下側の卓袱台を切りつけようとした次の瞬間

雄二から預かった、俺自身の最大の武器

サッカーボールを思い切り相手のカッターナイフを持っている方の手を目掛けて蹴り放った。

「な、何!？」

「随分と卑怯なマネしてくれるじゃねえか、Bクラス！」

「くっ……くっ……これでも喰らえ！」

そう言ってBクラスの1人が取り出したのはスタンガン。

普段なら逃げる状況だけど、丁度良い所に跳ね返ってきたサッカーボールもあるし、すぐに逃げてくれれば逃がしてあげようと思っていただけ、そっちがその気なら仕方ない。

俺はサッカーボールを再び思い切り蹴り飛ばし、スタンガンを持った方の今度はみぞおちにぶつけた。

すると、その生徒はがくつと膝から崩れ落ちた。

「なっ!？」

「さて、お前はどつするんだ？」

倒れているBクラスのヤツからスタンガンを奪い取って、そのスタンガンを見せながら、先ほど手に思い切りサッカーボールを蹴り放った方に軽い脅しをかける。

まあ、こっちにはスタンガンにサッカーボール。

あっちにはこれといって武器になりそうなものはない。これはもう勝負がついたと同じだ。

「くっ、くっで退散させてもらおう!」

そう言ってBクラスの男子生徒は走って教室を出て行った。

うん、この気絶しちゃったBクラス男子はどうしよう?

「あれ? 聡?」

「んむ? 聡、その男は誰じゃ?」

明久と秀吉が揃ってやってきた。

「ああ、ちよつとな……」

そしてその後、俺は2人に雄二から頼まれたこの作戦を説明した。

「へえ、聡は馬鹿なだけかと思ってたけど、サッカーはやっぱりうまいんだね」

「ホント、サッカーバカじゃのう」

「秀吉、それは一応褒め言葉として受け取っておくよ。そして明久！お前にだけはバカって言われたくない！」

そんなことを話していると、雄二と近衛部隊の数人が揃って教室に帰ってきた。

「聡、その様子だとどうやら成功したみたいだな」

雄二は、教室内が無事なことと、俺や秀吉のそばにいる気絶しているBクラスの生徒を見て、そう言った。

「ああ、そろそろ本体と合流しても行ってもいいだろ？」

本当はすぐにも根本のヤツをぶっ飛ばしに行きたかったけど、まあ作戦だったし仕方ない。

「ああ、行って来い……と言いたいところだが」

雄二は時計を見ながら言う。

「今日はもう無理だな」

「今日は？」

「ああ、協定を結んできたんだ」

そういえば、恐らくBクラスは協定を結びに来ると思うから、教室を開けることになるから、俺にさっきの作戦を任じたんだっけ。

「どんな協定を結んできたんじゃ？」

「4時までに決着が着かなかつたら戦況をそのままにして、続きはまた明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関する行為を全て禁止する。ってな具合にな」

「それ承諾したの？」

「そつだ」

そんな協定を結んだのか……。

でも、Fクラスは50人中47人が男子。体力勝負はどう見ても男子女子の比率の差が少ないBクラスよりも強いはず。

「体力勝負の方がこのクラスは強いんじゃないか？」

「姫路以外、はな……」

ああ、なるほど。たしかにこのFクラスは雄二と姫路さんで持っているようなクラス。

体があんまり丈夫じゃない姫路さんに無理をさせて、全体的に有利な体力勝負をするよりも、姫路さんが万全に戦ったほうがコチラとしては都合がいい。

んー、でも何か引つかかる。このクラスの補給を邪魔しようとするだけでわざわざ対等な協定を根本が結ぶとは思わない。

宿敵だからというか、だからこそ、ヤツがそんな甘い男じゃないって気がする。

「といわけだ。聡、お前は明日存分と暴れてくれ」

「わかったよ」

そんなことを話していると4時、授業の終わりを告げるチャイムが校舎中に鳴り響いた。

「ところで戦況はどうなってる？」

「一応計画通り教室前までは押せたみたいだ。だが、こちらの被害も少なくはないらしいがな」

雄二が前線で指揮を執っていた姫路さんから、メモを受け取ってそれを簡単にまとめて読み上げた。

まあ被害が大きいのは相手がBクラスだし、雄二も多少は予想してただろう。

なら、まあ順調に進んでいるってところかな？

でもあの根本。まだ何かを隠し持っている気がしてならない。

「お、ムツツリーニ。何か変わったことでもあったか？」

気づけばムツツリーニが俺達の近くに来ていた。

そういえば今日のムツツリーニは情報係で、戦闘には直接参加せずに裏方というか、裏でコソコソというか、まあいつものムツツリーニみたいな役割だった。

「何？Cクラスが試召戦争の準備を始めているだろ？」

雄二がそう言つとムツツリーニはいつも通り首をコクリと縦に首を振った。

「CクラスがAクラスに宣戦布告するとは思えないし」

「ああ。恐らく漁夫の利を狙うつもりだろう。嫌らしい連中だ」

雄二の言う通り恐らくこのFクラスとBクラスの勝者に宣戦布告するつもりだろう。

Fクラスが勝てばBクラスの設備になるんだから、Cクラスが攻めるメリットだってあるし。

「どうする？雄二」

「んーそうだな」

明久の問いを聞くと雄二はまた先ほどと同様に時計をチラッと見た。

「Cクラスと協定でも結ぶか……。Dクラスを使うぞとでも脅しをかければ俺達を攻めてこないだろう」

「まあどうせこのクラスがBクラスに勝てるなんて思ってないだろうし」

「よし、じゃあ今から行って来るか。秀吉は念のため、ここに残っておいてくれ」

「なんじゃ？ワシには聴みたいに敵からこの教室を守るスキルも道具もないんじゃが？」

「お前の顔がCクラスに知られると、万が一の作戦に支障があるからな。大丈夫、心配はないさ」

万が一の作戦ってなんだろう。気になるけど、まあとりあえずはCクラスと協定を結ばないと。

でも人数不足が心配だなあ。でも放課後でみんな帰っちゃったし。

秀吉を教室に残し俺、明久、ムッツリーニ、たまたま教室にいた須川、そして雄二。万が一の場合、代表である雄二を守るだろうか。

「あれ、アンタ達揃いも揃ってどこに行くの？」

5人でCクラスに向かう途中、美波と姫路さんの2人とたまたま遭遇した。まだ帰ってなかったのか。

「あ、美波、ちょうど良かった。ちょっとCクラスまで一緒に来てくれない？姫路さんも暇だったら」

美波は置いといて、姫路さんは点数が高いし、その存在感は相手にも知れ渡っている。相手も多少びびったりするだろう。

「んー、別にいいけど？」

「はい、大丈夫です」

そして新たに女子の2人を加えた7人はCクラスへと向かっていっ

た。

「Fクラス代表の坂本だ。Cクラス代表はいるか？」

Cクラスに着くなり、雄二が扉を開けて教室全体の注目を集めるように言った。

Cクラスには放課後だというのにほとんどの生徒が残っていた。恐らくムツツリー二の情報は正確なんだろう。まあムツツリー二の情報が違うことなんてほとんどないんだけどね。

「私だけど何か用？」

俺らの前に立ち名乗りを上げるのは、見るからに美波みたいな気の強そうな女子。

根本の彼女だったと思う。バレエ部のホープとか言われてたな。

「Fクラス代表としてクラス間交渉にきた。時間はあるか？」

「交渉……ふうん」

嫌らしい笑みを浮かべているところを見ると、やはり漁夫の利を狙うつもりなんだろう。

なんだか、こつこつとこころは根本に似ているような気がする。

「ああ、不可侵条約を結びたい」

雄二が交渉の内容を言う。CクラスはまさかFクラスがBクラスに勝つなんて思っていないだろうし、あっさり認めてくれると助かるんだけど……………

でも次の一言はFクラスの誰も想像していない言葉だった。

「不可侵条約ねえ……………。どうしようかしら、根本クン」

そう言ってCクラス代表は教室の奥の方へと相談を持ちかけた。

って、あれ？根本？

「当然却下。だって必要ないだろ？」

「なっ！？根本君！Bクラスの君がどうしてここに！？」

そこには椅子に座って不敵な笑みで俺達のことを見ている根本の姿があった。

第十一問

「酷いじゃないかFクラスのみなさん。協定を破るなんて。試召戦争に関する一切の行為を禁止したよな？」

くそっ、根本のヤツ、やはり何か企んでいたのか！

でも根本とCクラスの代表の小山が付き合っていることは俺も知っていたし、もっと早く気づけばこんなことにならなかったのに・・・

217

「何を言って」

「先に協定を破ったのはそっちだからな、お互い様だよな？」

根本がそう告げると、同時に奥にいた生徒に囲まれる。そして根本の背後には小柄な数学の長谷川先生が隠れていた。

くそっ、Cクラスが試召戦争をしているのを利用したのか。抜け目のないやつだ。

「僕らは協定違反なんてしていない！これはCクラスとFクラスの
」

「無駄だ明久！根本は試召戦争の一切の行為を禁止するというのが盾にするに決まってる！」

くっ、まずい………！

こちらには姫路さんがいるとはいえ、相手は今いるFクラスの倍以上。

姫路さんが戦死するなんてことになればFクラスの士気が一気に下がるのも想像できる。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を」

「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！」

Bクラスの1人が代表の雄二に攻撃を仕掛けようとしたところを、間一髪で身代わりになった。ナイス須川！

「聡、明久、ここは逃げるぞ」

「ああ」

「くそっ！」

須川を助けたいところだけど、この人数じゃ助けることもできない。

それに須川もそれを承知で、Fクラスのために動いてくれたんだ。ここはなんとしても代表を守って逃げないと。

「でもどうするのよ!?! 囲まれてるわよ!?!」

美波の言う通り、Fクラス7人を囲むように円になっているBクラス。もちろんドアの前にも立っている。

どこを見ても逃げられそうな道は存在していない。

なら仕方ない。

ここは強行突破しかない……！

「っおらあッー！」

上履きのかかとを踏んで、思い切りドアの窓ガラス目掛けて蹴り飛ばした。

「ひゃあっ！」

ドアの前にいた2人の女子は、その上履きに悲鳴を上げながら避けてしゃがみこんだ。

そりゃ思い切り蹴ったから結構な速さだったはずだ。

バリッ！

そして窓ガラスに命中し、ガラスが割れた時特有の効果音が鳴り響く。

「みんな、今だッ！」

丁度、ドアの前にいた女子の二人はしゃがんでいて、ドアへの道も空いている。

それにBクラスの人はかなり動揺している。チャンスは今しかない！

「「「「「おおーっ！！」「「「「」

Fクラスの他の6人も驚いていたが、すぐに我に戻って教室を飛び出すように走り出した。

「逃がすな！坂本を追え！」

すぐさま背後から聞こえてくる根本の指示と、複数の足音。ここからが正念場だ！

「はあ、ふう………」

「瑞希、大丈夫？」

廊下を走っていると少しづつ姫路さんが遅れだした。

無理もない、試召戦争で疲れてる上にここまで全力疾走したんだ。

それにここにいる姫路さんを除く5人は運動神経が良い人ばかりだ。

「あの……、先に、行って、ください」

息も絶え絶え姫路さんが言う。このままのペースで行けば代表である雄二は余裕で逃げられるだろうけど、姫路さんは確実に追いつかれる。

でもここで姫路さんを失うのはFクラスのやる気や意気消沈だけでなく、俺達にも、女の子を守れなかったということになる。

「ここは……うん、仕方ない。」

「雄二」

「なんだ。聡」

「ここは俺が引き受ける！雄二達は姫路さん達を連れて早く逃げて
！」

なんか戦闘物のドラマや映画みたいなキザなセリフだけど、今は構
っている暇はない。

「椎名、君、私のことは、気に、しないでください」

「……わかった、お前に任せるぞ」

雄二が姫路さんの言葉を遮るようになして応える。

さすがは雄二、感情に流されない判断だ。

「聡！僕も残るよ！」

明久も立ち止まり、俺に訴えてくる。

「いや、明久。お前はダメだ」

「なんで!?!」

「お前がいても足を引つ張るだけだからだ!」

「酷いッ!僕がせっかく男らしいセリフを言ったのに!」

「冗談だ。お前は姫路さんと一緒に行つて、守つてやれ。それがこの試召戦争の目的なんだから?」

そこまで冗談でもないんだけど。

「聡……。そこまで言うなら、わかったよ!」

明久はそう言つと雄二と姫路さんの後を追いかけていった。

そして次はムッツリーニが俺の前で立ち止まった。

なんていうか、良い友達を持った気がしてくる。でもここは

「ムッツリーニも逃げて欲しい。明日はきっとムッツリーニの活躍が勝負の行方を左右すると思うから」

「んじゃウチは残っていいかしら？隊長どの」

隣には一緒になって立ち止まっていた美波がいた。

「……じゃあお願いできる？」

「はいはい、お任せあれっ」

そう笑いながら追っての方を見る美波。1人よりももう1人いた方が圧倒的に気持ち的にも楽になる。

「ムツツリーニ、早く行かないと来るよ！」

「……任せた」

するとムツツリーニは親指をグツッと立てて、走り去っていった。

さて、たまにはちょっと男らしいところを見せてやるか！

第十二問

「で、どうするの？」

美波がそう聞いてくるけど、特に作戦なんて考えてない。

でも美波がまだいけるなら、あの作戦でいけるかな……？

「美波、まだ走れるか？」

「余裕よ」

美波は昔から男子並に運動が得意だったし、姫路さんと比べて胸も

なくて体も軽いからきつと動きやすいんだろう。

「何か失礼なこと考えてなかった？」

「別に……」

勘の鋭さも昔から。

『いたぞっ！Fクラスの椎名と島田だ！』

『ブチ殺せえ！』

正面から長谷川先生も連れて、追っ手がやってきた。

「美波。雄二達とは逆側に逃げて雄二達の方に追ってが行かないようにする。そして俺達は走り回って逃げ回るって作戦でいいか？」

「アンタらしい単純な作戦ね……」

単純とは失礼な。ちゃんと逃げ切れる自信があるからなのに。

「でも今更新しい作戦考える余裕もなさそうだし、その作戦乗ったわ！」

「よし、じゃあ行くぞー！」

作戦を決めて走り出すと、携帯に雄二からメールが来ていることに気がついた。

メールの内容は、雄二達は教室の秀吉や、俺や美波のカバンを連れて屋上に一旦避難したらしい。

教室の鍵は閉めたから何かされることもない。とのことだ。

雄二達が屋上にいるならここは下の階に逃げれば、多少時間は稼げる。

「下の階に行くぞ！美波！」

「わかったわ！」

『待て！』

『くそっ、なんて足の速さだ！』

伊達にサッカー部に入っていないからね。

そして段々と俺や美波とBクラスの連中との差が広がってきた。

「よし、あそこの際間から準備室に入るんだ！美波」

俺は化学準備室の前の廊下にある、わずかな隙間を指差しながら言った。

毎日のように鉄人から逃げているため、教室の配置やどこに行けば隠れる等の知識はこの学校の誰にも負けないと思う。

「ちょっと、あそこから人が入れるの!？」

美波が疑うように聞いてくる。いつも入っているから心配ないのに。

「いつも入ってるから大丈夫！それに美波は体が全体的に痩せてるから通れるよ！」

「それって遠まわしに胸がないって言うてない？まあいいわ、入るね」

いつもなら殴る蹴るの暴行を受けていたところだけど、余裕がないから美波も目を瞑ってくれたみたいだ。

そして、わずかな隙間から準備室へと入った。

窓から入るはずの西日がカーテンで塞がれていて、バレるために電気もつけられない。そのため準備室の中はかなり暗くなっていた。

そんな準備室の隅で、俺と美波は静かに身を隠した。

『くそっ！椎名と島田はどこに行きやがった！』

『いや、待て。急にいなくなるのはおかしい。どこかこの近くの教室に隠れている可能性も低くない』

ふむ、さすがはBクラスか。

灯台下暗しでまずは周囲の教室を探すなんて、頭が固い鉄人よりも頭がキレてる。

「どつすんのよ聡。ここじゃ見つかったら逃げられないじゃない」

美波が廊下に聞こえないぐらいの小さな声で話しかけてくる。

「この机は職員室の机と同じで、は向こう側や横から足の入るところが見えなくなってる。だからこの机の下と同じ色の板を使って二重壁を作ってその中に隠れれば大丈夫」

「アンタ、どんだけ追われるのに慣れてるのよ……」

否定はできないね。

『「」も一応見てみるか』

そう言っつてBクラスの連中3人ほどがこの準備室へ入つてきた。

鍵は閉まつてるはずなのに。やはり相手には先生がついているのか。

「美波、こつちに」

「わかつたわ」

そして美波を先に机に入れて、その後には二重壁用のダミーの壁を持つて中に入る。

「」
「」
「」
「」
「」
「」

というか、今になって気づいく。

ここは暗いだけでなく、かなり狭くて2人で入ると、今にも肩がぶつかりそうで、なんだか微妙な空間だ。

隣を見れば美波の顔がすごい近くにあるし。

幼馴染で、美波達が海外にいる間以外はだいたいつも一緒にいたけど、ここまで近くでじっくりと顔を見たのは初めてだと思う。

なんというか、目の辺りとかは男らしいところあるけど、け、結構

可愛い顔してるんだな……

って、な、何考えているんだ俺はッ！

相手はあの美波だぞ！何、顔が赤くなってんだ！

『ここにはいなさそうか？』

『ああ、いなさそうだな』

そ、そうだ、今はBクラスに追われているんだ。気持ちを引き締め

なおさないと・・・！

そう思って、頬を軽く二回ほど叩いた。

でもその叩いたときに、俺の肘が美波の肩らしきところに当たってしまった。

「ああ、じめん美波」

先ほど以上にさらに声のボリュームを下げるようにして美波に言った。

「ちょっと、どい触ってるの」

美波が少し怒りつつ言ってくるけど、声はかなり小さな声だ。

だいたい、そんな風に言えばまるで俺が美波の胸や尻を触ってしまったみたいに思われるじゃないか。

「別に悪気があったわけじゃ、ぶつかっただけだし。それに肩なんだから良いじゃん」

この狭さの中なんだから少しぐらいは多めに見てくれてもいいのに。

「……………肩ですって?」

ん？今何かが切れたような気がしたけど……

「え？肩じゃないの？なんか骨があるところだったと思うけど……
……って何？！なんで肩掴むの？ってぐわあ！痛い痛い！今だとB
クラスに聞こえちゃ……肩が砕けるように痛い！！」

美波が何故か物凄い強い力で肩を掴んできて、途中から思わず大きな声を上げてしまった。

くそっ、これじゃあ……！！

「今声がしたぞ！絶対この教室のどこかにいる！探せ！」

気づかれてしまっている。

このままじゃ気づかれるのも時間の問題だ。

「聡、もうここは正面突破しかないんじゃない？」

すぐに我に返って落ち着きを取り戻した美波が耳打ちをしてくる。

まあ、たしかにこのまま何もしなければ気づかれちゃうけどさ。

「正面突破って………Bクラスに勝てるの？」

「たしか長谷川先生って数学よね？それなら……」

そう言うと美波はダミーの壁を払い、Bクラスの前へと顔を出した。

きつと、美波には何か考えがあるんだろう。それに続いて俺も立ち上がった。

「いたぞ！Fクラスの椎名と島田だ！」

「ちよろちよると動き回りやがって、疲れるだろうが」

「そうそう、さっさと掃除して帰りましょ」

随分とひどい言われようだ……

「ちょっと、言ってくるじゃないの」

そんな相手の態度に美波が食ってかかる。相変わらず気が強い。

「だって……なあ」

「お前等最低クラスじゃん」

「ふん、その最低クラスに負けたらアンタ達は聡や吉井のような救いようのないバカね」

「待て美波。その発言は俺のことを侮辱しているようにしか聞こえない！」

救いようのないバカは正真正銘、明久のことだ。

「ふん、所詮Fクラスだろ？」

「なら自分の目で確かめるものね。サモンツ！」

その喚び声で現れる美波の召喚獣。Dクラス戦の時も出してたから初めて見るってわけでもないな。

「上等だ！実力を思い知らせてやる！サモンツ！」

Bクラスの1人も召喚獣を召喚し、美波の召喚獣と真正面からぶつかり合う。

というか美波、Bクラスの召喚獣と真正面からやり合っても勝てるわけ

Bクラス 工藤信二 VS Fクラス 島田美波

数学 159点 VS 171点

勝ってる？点数で勝ってる！？

「お前本当にFクラスか？」

Bクラスの生徒も驚きを隠せないで居る。

それもそうだろう。同じクラスかつ幼馴染の俺だって知らなかったんだから。

「ふふ、数学を選んだのが間違いだったわね。数式なら漢字が読めなくても解けるのよ！」

なるほど、美波はドイツからの帰国子女で小中学校は海外で過ごし

ているから、漢字の読み書きはできないけど、数学は普通に解けるのか。

「工藤君、フォローしようか？こんなところで補習行きなんて嫌でしょ？」

「くっ、頼む」

悔しそうに言うBクラスの工藤。Fクラス相手に点数で負けるのだからでもそこそこ屈辱なのに、負けて補習行きなんて言ったらさらに屈辱になる。

でもこれで美波は一気にピンチだ。1対1では点数で勝ってるけど、敵が増えればまず勝ち目はない。

ここは仕方ないけど、俺も協力するしかないか。

「美波、フォローしようか？」

「いらないわ。足手まといだからすっこんでなさい」

酷い言われようだ。

けど今はふざけている場合じゃない。フィードバックは痛いけど、戦うときがきたんだ！

「サモンッ！」

足元に魔法陣が出てやがて召喚獣が召喚された。科目は数学だから数学の点を持っていることになるんだけど

Fクラス 椎名聡

数学 12点

「役立たず！」

たしかに美波の点数に比べれば7分の1ぐらいの点数だ。周りに頭の悪いFクラスがいないからますます目立つじゃないか。

「雑魚は置いておいてまずはその強いほうから倒しましょう」

「敵からも雑魚扱いとは！」

「それじゃさよなら」

そう言つてBクラスの女子は美波が罅迫り合いで動けないところを目掛けて切り込んできた。

「ここは俺の出番だ……！」

「そうはさせないっ！」

召喚獣を巧みに操り、相手の召喚獣に足をかけて転ばせる。

俺を無視していただけあつて、相手は全然警戒していなかったから簡単によろめいた。ここで叩き込む！

「おっ！」

敵に唯一の武器である木刀を叩き込んで完全に体勢を崩す。

「これでもくらええっ！」

俺の召喚獣が倒れこむ相手の召喚獣の後頭部を掴んで、地面に叩き込んだ。

「「「「え……………」」」」

Bクラスの生徒だけでなく、隣の美波からも驚きの声が聞こえる。

「聡、どういふこと？」

「んー、観察処分者の唯一の利点ってところかな？」

「利点？」

「簡単に言えば召喚獣を操るのに慣れてるってこと」

俺や明久のような観察処分者は毎日のように教師からの雑用を召喚
獣で手伝わされてるから、嫌でも慣れてくる。

痛みやフィードバックといった点もあるけど、物体に物を触れな
ければ、足をかけたり、木刀を振り回したりできないだろう。

「ぐっ、偶然よ！」

Bクラス女子が再び刀を構えて突撃してくる。ムキになってくれ
ばなるほどこっちの思いつツボだ。

「おりゃあっ！」

横からあわせるように木刀で相手を転ばせる。点数は相手の方が6倍ぐらい高いんだけど、プレイスキルでもなんとかできる。

「喰らええっ！」

そして木刀で相手の召喚獣を叩き込む。点数はそこまで大きさに減らないけど、少しずつ確実に減ってきている。

「くっ、ここは一旦退くわ！」

Bクラス女子が一旦退くがまだBクラスには2人残っている。

こっちも2人だけど、美波も先ほどの鏢迫り合いで点数を消費してるからもうほとんど残ってないはず。

ここはDクラス戦でも使った最終兵器を使っしかない！

「美波！アレを使うんだ！」

「了解！」

消火栓を指差しながら言うと、美波は理解してくれたのかすぐさま消火栓を抱え上げ、安全弁を抜いた。

よし、これで逃げれる！

「・・・・・・・・」

はずなのに、美波は動かない。どうしたんだ？

「美波！どうしたの！早く使って！」

「うーん、どうしよっかな？」

美波が凄く楽しそうに笑顔を作りながらこちらに投げかけてくる。

こゝこんなときに美波のDS本性を表すなんて！

「な、何が望みなんだ！美波」

「望み〜？そうねえ〜じゃあまず呼び方を変えてもらいましょうか」

呼び方程度だったらなんでも良い。

幼馴染だし、ずっと名前で呼び合ってるんだ。

「変える！変えるよ！なんて呼べばいいの！？」

「じゃあ………美波様って呼んでみて？」

「美波様！これで良い？」

「今度の休み、駅前の『ラ・ペディス』でクレープ食べたいな」

くっ、貧乏学生で一人暮らし。仕送りもギリギリで生活しているのに、そんな贅沢なものが……！！

でもここは従うしか選択肢はない。

「奢る！奢るから早くそれを！」

「よしよし。じゃあ最後に」

まだあるのか……

「ウチのこと變じてるって言ってみて？」

……。

これは無理だ。

「……無理！　　って待て美波！消火栓を持って置いてかないで！」

「じゃあ言いなさい」

るのか！
くそ……！帰国子女で漢字が苦手なくせに……漢字は読め

「字が違つわ」

「くっ……あ、あい、哀してる」

「ウチは變してると言えって言ってるのよ？」

「くっ……あ、變、變して……ない！」

もう愛してるって言うことしか選択肢は残ってないのか。

仕方ない！凄く恥ずかしいけど、身の安全とそれと試召戦争の勝利のためだ！

「じゃあもう良いー愛して」

「椎名！」

あともう一息というところで、準備室に鉄人こと西村先生、いや、鉄人は鉄人か。鉄人が入ってきた。

「な、なんですか？先生」

「Cクラスの窓ガラスを割ったそうじゃないか」

げっ、そのことが！まずい。鉄人にバレたら鬼の補習という名の地獄が待っている……！！

ここはなんとしても誤魔化さない！

「な、何のことでしょう？」

「CクラスとBクラスの数人が全員揃ってそう主張している」

「そ、そんなの、嘘ついてるかもしれませんよ？本当は、ほら、Bクラス代表の根本がやっちゃって、俺に罪をなすりつけよう」と

「じゃあなんでお前の上履きがガラスの破片の中にあっただんだ？」

.....

ダメだ。物的証拠じゃないか。言い逃れできない。もう笑って誤魔化すか。

「あはは、それはきつと偶然じゃないですか？」

「そうか、偶然か。珍しいこともあるもんだなあ」

「そうですね、あはは」

笑いあう俺と鉄人。お願いします、目も笑ってください。

「さて、みっちりしじいてやる」

「いやあああっ!」

その後、鉄人に補習室へと連行されて、一応戦死の危機は脱出した。結果的には良かったかもしれない。

美波も結局消火栓を使って逃げられたみたいだけど、何故か凄く機嫌が悪かったのはなんでだろう？

第十三問

鉄人の拳付きの補習を夜遅くまでやった翌日。

「今から昨日言ってた作戦を実行する」

Fクラス代表の雄二が教壇に立ち、開口一番にそう言った。

「作戦って何？」

「秀吉にコレを着てもらおう」

雄二はそう言っているとカバンからこの学校、文月学園の女子の制服を取り出した。

黒のブレザーに赤いスカートとネクタイが良い具合にマッチして
いて、とても可愛い制服だ。

でも雄二……。なんでそんなものを持っている？何があったの？

「それは別に構わんが、ワシが女装して何をするのじゃ？」

男としては少し構ったほうがいい気がするけど、秀吉は秀吉だ。N
o p r o b l e m !

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

なるほど、そういうことか。

秀吉には同学年に双子の姉がいる。顔もそっくりで、とても可愛い美少女。

成績は秀吉とは打って変わってAクラスでも上位の方だ。

多分秀吉と成績ぐらいしか違いを見分けられないんじゃないかな？

そのAクラスの秀吉のお姉さんに化けて、Aクラスから圧力をかけるということか。

「というわけで秀吉、頼めるか？」

「仕方ないのう……」

やはり、姉の真似を悪い方向というか、利用するのはやはり姉妹としては複雑な気持ちなのかな？

秀吉は雄二から渋々といった感じで制服を受け取り、着替えを始めた。

この場で。

「ちょっと木下！なんでこんなところで着替え始めるのよっ！」

「そつですよっ！ここで着替えちゃダメですっ！」

「ワ、ワシは男なのじゃが……」

くっ、もうちょっとで見れたのに……。

でも秀吉の生着替えを想像しただけで鼻血が出てしまう。

隣ではもうすでに鼻血だらけでノックアウトなムツツリーニもいるし、ここで着替えたなら多分戦争どころじゃなくなってしまう。

そして結局、秀吉は美波や姫路さんに言われたように、トイレで着替えてきた。

「じゃあCクラスに行くぞ」

「うむ」

そして俺、雄二、明久、そして秀吉の4人でCクラスへと向かった。

「さて、ここからは一人で頼む。秀吉」

「うむ、気が進まんのう……」

Cクラスの前で俺達は立ち止まっていた。

秀吉と一緒に俺や明久が行ったらすぐにAクラスの生徒とは思われなくなるだろうし、ここは秀吉1人に行ってもらうしかない。

「そこをなんとか頼む」

「むう、仕方ないのう……」

「悪いな。とにかくアイツらを挑発して、Aクラスに敵意を向けるように仕向けてくれ。演劇部のホープならできるはずだ」

そう、秀吉は演劇部のホープ。演技だけじゃなく声マネとかもうま

い。

ましてや、顔が瓜二つの双子の姉妹ともなれば、初対面の人にバレることはないだろう。

「はあ、あんまり期待せんでくれよ……」

そう溜息を吐きながら言うと、気が重たそうにCクラスへと向かっていった。

本当に大丈夫かな？少し不安になってきた。

演劇に関してはこれ以上ない才能を持っている秀吉だけだ。

「秀吉大丈夫かなあ。心配だ。」

「雄二、何か他に作戦考えといたほうがいいんじゃない？」

「シッ、秀吉が中に入る」

雄二によって会話を遮られると、耳を澄ますようにして秀吉の行方を見守る準備をする。

そしてガラガラガラという教室のドアを開ける音が聞こえてきた。

『静かにしなさい！この薄汚い豚共！』

・・・これは。

「さすが秀吉だね」

「うん。これ以上はない挑発だね」

『何よアンタ!』

秀吉のいきなりの罵声を聞いて、Cクラス代表の小山さんが怒りながら言ってくる。

そりゃいきなり薄汚い豚共だもん。そりゃあ怒るよね。

『話しかけないで！豚臭いわ！』

自分から話しかけてその返答とは、これ以上ない挑発だ。

『アンタ、Aクラスの木下ね？点数がちよっといいからって調子に乗らないでくれるっ！？何の用よ！？』

演劇部のホープとしてや、生物的には男なのにあの可愛さで、男子からの知名度はかなり高いけど、女子からはそこまで知名度は高くない。

それ以前に秀吉は女装しているんだから、どう頑張っても見分けがつかないだろう。

それに加えてあの演技力。あれで十分敵意はAクラスに向いたはず。

『私はこんな臭くて醜いようなクラスが同じ校内にあることが我慢できないの！貴方達なんて豚小屋で十分だわ』

『なっ！私達にはFクラスがお似合いですって!?!』

豚小屋「Fクラスなんていう発想はおかしいと思う。

『戦って手が汚れるのは嫌だけど、仕方ないから私達Aクラスが近いうちに貴方達を豚小屋に送ってあげるから』

すごい演技力だ。演劇部ってここまでできないとダメなのか？

『ちょうど試召戦争の準備もしていたところだし、覚悟しておきなさい』

そう言い残し、秀吉はCクラスを出てきた。

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラスに宣戦布告しましょー！』

Cクラス内では代表がそう叫んでいる。

完全に作戦成功だ。

「これで良かったかのう？」

秀吉がやりきったような顔をして額に手を当てている。

「ああ、素晴らしい仕事だった」

「さすが秀吉だよ！」

「よし、作戦も成功したところでBクラス戦の準備をするぞ」

「そうだ、余裕なんてない。」

あと10分もしないうちに試召戦争が始まる。

そして俺達は足早にFクラスへ戻って準備を開始した。

〈明久Slide〉

「ドアと壁をうまく使っんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。午前9時になり、Bクラスとの戦争が再び始まった。

一応Bクラスを押し込むことはできているし、多少はこちら有利で進んでいるのかもしれない。

雄二曰く、今の作戦は『敵を教室内に閉じ込める』とのこと。

Dクラス戦でも、さっきの秀吉の演技の件でも、結果を出している雄二の作戦だし、きっとこれもうまくいくだろう。

でもここで一つ、大きな問題があった。

姫路さんの様子がおかしい。

彼女を中心にして動いているこの前衛部隊だけど、今日は一向に指示も出さないし、戦闘に参加しようともしない。

何かあったんだろうか？

「勝負は極力単体教科で挑むのじゃ！戦死だけはするでない！」

そういうこともあって今は副指令の秀吉の活躍でなんとか持っているところ。でも

「左出入り口押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！」

少しずつ押されつつある。昨日のBクラスはずっと様子見てとこ
ろだったし、やっぱりこのまま押し切るのは厳しいか。

「姫路さん！左側に援軍を！」

雄二の作戦によると今日の戦争も姫路さんが重要な役割を担うらし
いからなるべく休ませてあげたいけど、こういった場面だし仕方が
ない。

「あ、あの、そ、その……」

その姫路さんが今日はまったく機能していない。今にも泣き出しそ
うな顔でオロオロとしてしまっている。

ってマズイ、突破される！

「だあ！」

掛け声とともに人混みを掻き分け古典の竹中先生のところへ向かう。
この先生には決定的な弱点がある。

「先生、ツラずれてますよ……」

「しよ、少々席を外します！」

耳元でそう囁くと先生は試召戦争中にも関わらず席をはずした。

「古典の点数が残ってる人は左側に！消耗した人は補給を！」

応急措置だけど、これで少しは持ち直してくれるはず。

……ちっ、じじい

「姫路さん、どうかしたの？」

姫路さんに話しかける、どうみても様子がおかしい。この原因は聞かないとわからない。

「そ、その、なんでもないですっ」

ブルブルと首を大きく横に振る姫路さん。その仕草がますます何かあるように思えてくる。

「そうには見えないよ。何かあったなら話してくれないかな、このままだと作戦を変えないといけないし」

「ほ、本当になんでもないです！」

そう言う姫路さんの表情は今にも泣き出しそうだった。

「右側押されだした！援軍求む！」

「あ、私行つてきます」

姫路さんがそう言って戦場に加わるつと駆け出した。でも

「あっ……」

急にその動きを止めて俯いてしまった。

何かを見て動きを止めたように見えたけど……、姫路さんが
見たほうを目で追ってみる。

その先には窓際で腕を組んでこちらを見下している卑怯者。根本君
の姿があった。

そして僕は見てしまった。彼が手にしているものを。

何の変哲もない、手に入れようと思えばすぐに手に入るけど、逆にいくらお金をかけても手に入れられないもの。

それはDクラス戦の日。

島田さんに気絶させられた聡をを保健室へと連れて行った帰りの教室で、たまたま書いているところを見てしまい、姫路さんが恥ずかしそうに隠していたあの手紙の入った封筒だった。

中身は多分、雄二か聡宛だと思うけど、それだからって僕に関係ないわけじゃない。

「なるほどね……………そういついとか」

昨日の協定の時、聡が根本が対等な協定を結びに来るのはまだ裏があるって言うってたけど、あの時点で常に姫路さんを無力化する計画があったのか。

それならあの協定だって領ける。姫路さんがいないFクラスは体力勝負に持ち込む以外、格上クラスに勝つなんてできないんだから。

「姫路さん」

「は、はい……………?」

「今日は具合悪そうだからあんまり戦線に行かないほうがいいかな。まだAクラス戦も残ってるんだし、体調管理は気をつけてもらわないと」

「はい……」

「じゃあ僕は用があるから行くね」

「あっ……」

姫路さんが何かを言いたげにしていたが、気にせずに背を向けて走り出す。

「面白い」ことをしてくれただじゃないか。根本君」

思わず思っていたことが口からこぼれる。

「あの野郎、ブチ殺す！」

第十四問

〔聡Side〕

「くっそー、なんでBクラス戦なのにテストなんだ！」

戦争が始まると同時に俺はテストをひたすら受けていた。

そりゃあ昨日色々と点数消費しちゃったけど……

せっかく今日は根本を倒せると思ったのに。

「雄二！」

そんなことを思いながら少しでも良い点数を取るために試験問題と睨めっこをしていると、明久が教室に入ってきた。

「どうした明久、脱走か？チヨキでしばくぞ」

「話があるんだ」

いつものヘラヘラした明久とは違って、今の明久は真剣そのものだ。

「とりあえず聞こうか」

そんな明久を見て雄二は察して、真面目な顔をして明久に向き合っている。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「………何があった」

「ああ、いや、その、えーっと………」

まさか明久がそんなに腐ってしまったとは。ましてや相手はあの根本だし

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれぐらいなんとかしよう」

雄二……そんな簡単に受け入れていいのか？

「で、それだけか？」

「それと、姫路さんを今日の戦闘から外して欲しい」

姫路さんを……？折角昨日あんなに苦勞して守ったっていうのに、外すなんて、前衛部隊で何が起こってるんだ？

くそっ、気になってテストに集中できないじゃないか……！！

「理由は？」

「理由はいえない」

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん、どうしても」

明久もずっと真面目な顔をしているし、「冗談な話じゃなさそうだ。

でも姫路さん抜きでFクラスでBクラスとまともに戦えるのだろうか。

戦力ダウンなんていうぬるい話じゃない。

「頼む！雄二」

明久は雄二に頭を下げていた。いったい何が起こっているんだろう、気になって仕方ない。

「条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前がやれ。手段は問わない。命を賭けても成功させる」

明久の提案にはかなりのリスクが伴っていた。姫路さんを抜きで戦うのはほぼ自殺行為と同じだし。

それに姫路さんはずして戦争に敗れば、当然責められるのは代表である雄二だろう。

にも関わらず、雄二は明久の条件を呑んで全てを任せた。

なんだかんだ言ってこの二人の仲は結構固いのもしれない。

「もちろん成功させてみせる！」

「良い返事だ。お前はタイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は問わない」

「みんなのフォローは？」

「一切無いと思っていたほうが良い。しかもBクラス教室の出入り口は今と変わらないままだ」

「……難しいことを言ってくれね」

たしかに難しい話だ。Bクラス教室の出入り口がどうなっているのかは知らないけど、ドアも2つしかないんだから、タイミングを計らうてと言われたってまずBクラスに入ることすら大変だろう。

ましてや代表はきつと奥の方にいるんだろうから、尚更難しい。

「それじゃうまくやれよ」

「え？雄二どこか行くの？」

考え込む明久を置いて、雄二は教室を去ろうとしている。

「Dクラスに指示を出してくる。例の条件でな」

Dクラスはこの前戦争して勝ったけど教室設備は交換していない。その代わりにDクラスにあるBクラスの室外機を合図が出たら壊すってことだったから、きつとその件だろう。

「明久、俺はお前を信頼している。お前は点数は低いけど、秀吉やム

ッツリー二のように飛びぬけているものがある」

「雄二……」

「うまくやれ、計画に変更は無いぞ」

そう雄二は明久に言い残し、教室を去っていった。

詳しくはわからないけど、結構大変な状況みたいだ。

でも明久があそこまで真面目な顔をするには、きっと何かがあるんだ。

「こっちは、うん。」

「明久、手伝うよ」

「聡……」

悪友として、友達として、協力しない手はない。

「私も手伝うわ」

俺に続いて、美波、そしてもう何人かも協力することになり、明久は何かを決心していた。

「で、何をすればいい？」

「聡、僕と召喚獣で勝負して欲しいんだ」

「吉井と椎名が召喚獣勝負だと？」

Dクラスの召喚戦争の立会いとして呼ばれた補習担当、鉄人こと西村先生が確認をしてくる。

「はい、お願いします先生！」

「観察処分者同士、一度は決着をつけたいと思っていたので」

向かい合う俺と明久

「でもそれなら何故Dクラスでやるんだ？」

先生の言う通り、今はDクラスにいる。俺と明久はもちろん、周りに居る人もFクラスの連中ばかりなので、先生も疑問なんだろう。

でもこのDクラスで戦争をするには理由がある。

「仕方ないんです。このバカ2人は観察処分者ですから、Fクラス

でやったら教室が崩れるんで」

美波がそう鉄人に説明する。

まあこの理由もなくはないんだけど、本当の目的は他にある。

「もう一度考え直せ」

「彼は同じ観察処分者でもあって、ライバルでもあるんです。お互いを知る為にも喧嘩をすることも必要だと思います」

明久がそう言うと、鉄人は深いため息をした。

「仕方ない。そういうことなら、承認してやるっ」

よし、これで召喚ができる。大きく息を吸って、腹の底から声を出した。

「「サモンツ!!」」

そして現れる召喚獣。観察処分者の召喚獣の目印、学ランに竹刀というおなじみの姿の2匹の召喚獣がお互い距離を取り合っていてにらみ合っている。

「行くぞっ!!」

明久の指示とともにこちらに突っ込んでくる明久の召喚獣。それに対

しこちらは壁を背に今にも駆け出すような姿勢をとっている。

「よけるっ！」

明久の召喚獣が拳を振り切って殴りかかろうとしたとき、俺はすぐさま召喚獣によけるように指示を出した。

ドンッ！

明久の召喚獣が勢い余って壁に思いきりパンチした形になった。

明久の召喚獣も俺と同じ観察処分者。人間の何倍も力を持っていて物体に触ることができる。

そのため、明久のパンチを受けた壁はその部分だけ殴った後がわかるぐらいに凹んでいる。

「次は俺の番だ！行け！」

召喚獣に指示を送り、動き出す召喚獣。そして壁際にいる明久に向かった駆け出した。

「喰らえ！」

「あまいつ！」

明久の召喚獣に当たるか当たらないかギリギリのところまで明久の召

喚獣は横へよけた。

ドンッ！

先ほどの明久の召喚獣と同じように俺の召喚獣も勢い余って壁を思い切り殴る形になった。

「ぐっ
」

観察処分者の召喚獣の痛みはその召喚獣を持っている本人に直接フ
ードバックされる。

壁を殴ったほうの右腕にすぎましい痛みがこみ上げてきた。

「聡、吉井、時間がないわよ」

美波が壁にかけてある時計を見てそう告げる。時刻は11時27分。作戦実行まで残り3分。

「行くぞ明久っ！」

「うおおおおっ！！」

その後もお互い壁を殴るよつに戦い合った。教室が少し揺るぐよう
な気がするほど。

『お前等いい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に固まりや

がって、暑苦しいっての』

根本のそんな声が聞こえてきた。BクラスはこのDクラスの隣にある。

『どうした？軟弱なBクラス代表さんはもうギブアップか？』

対するは聞きなれた声。Fクラス代表の雄二だ。

『はあ？ギブアップするのはそっちだろう？頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ』

『……お前等相手じゃ役不足だからな。休ませておくぞ』

『けつ。口だけは立派だなあ。負け組み代表!』

『負け組み代表?じゃあもうすぐお前が負け組み代表だな』

雄二が根本を挑発している。急がないと!

「おらああっ!」

5回目。明久とあわせて10回目の教室の壁への攻撃。

なんだか拳の先が温かかった。そこには結構な量の出血があり、Dクラスの床に血溜まりができていた。

「お前等！何をやってる！」

鉄人がそう言うてくる。

「西村先生！お願いします！止めないでください！」

「お願いします！」

いつもと違って俺も明久も目は真剣だ。

「……何かいえない理由でもあるのか？」

いつもは先生に怒られても逃げることはかり考えて、正直殆ど頭を下げたりすることはやってないけど、今日は違う。

その雰囲気を感じてくれたのか、鉄人も真剣な口調で尋ねてきた。

「はい、男としてやらなくてはいけないことがあります！」

明久がいつもよりはつきりとした声でそう告げると頭を下げた。それに釣られて俺も頭を下げる。

「……………」

その様子をじっと見ている鉄人。頼む！ここで召喚許可がなくなったら……！

「いいだろう。その男としてやらなきゃいけないこと、見せてもらおうか！」

そう言った鉄人はいつもよりも男前に見えた。

「はい！ありがとうございます！」

そう鉄人にお礼を言うと、再び雄一と根本の会話が聞こえてきた。

『……さっきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやっっているのか？』

『人望の無いお前への嫌がらせじゃないのか?』

『けっ、だまつてる。お前等!坂本目指して一気に押し出せ!』

『……一旦立て直す。一旦下がるぞ!』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか?』

そろそろだ。時刻も後1分切っている。

「聡、そろそろだよ」

「ああ、わかってる……！」

そして周りにも目配せをする。みんなはだまって頷いた。

「「「うおりゃあああああっ！！！」」

今までにないような力を込め、叫ぶような大声を出しながら召喚獣が壁を攻撃した。

この作戦は、このDクラスとBクラスの境目にある壁。この壁を破壊して、相手の教室に殴りこむのが目的だ。

明久との召喚獣勝負はこの作戦を成功させるための方便でしかない。

「ぐっ
」

今まで以上に強く殴ったから、帰ってくる痛みも今まで以上に痛い。

けど、こんなことができるのは俺と明久の召喚獣しかいない。バカの代名詞、観察処分者の俺達にしか！

ドゴオッ

そしてついに、Bクラスへと続く壁を破り、道がつながれた。

「ンなっ!？」

Bクラスの窓際で足を組んで余裕そうに座っていた根本の表情が—
変する。

向こうの戦力は雄二の挑発によって、雄二率いる本軍を追っている
ため、教室にはほとんど残っていない。

「先生！Fクラス島田美波が—」

このまたとない好機に先ほどまで一緒にDクラスにいたFクラスの人
達が入り込む。

「Bクラス山本が受けます！サモンッ！」

くっ、近衛部隊か！

根本との距離は20メートル程度、FクラスやDクラスと比べて馬鹿でかいこのBクラスだからこそ、随分と距離がある。

「は、ははっ！椎名、残念だったな！お前等の作戦は失敗だ！」

取り繕うように笑いながら、根本はそう言った。確かにこの奇襲作戦は失敗に終わった。

近衛部隊に囲まれた今、俺達が根本に勝負を申し込むことができないうえに、補習送りにされるだろう。

でも俺達の目的は果たした。

「ムッツリーニ！」

大声で友人の名前を呼ぶ。

エアコンが停止されていて暑い教室。窓はほぼ全開の状態だ。

そこからロープを使って2人の影が、根本の後ろへと忍び寄った。

ここで、簡単に各教科の先生の特徴を簡単に説明しよう。

数学は、採点は厳しいけど採点はかなり早い。

世界史は採点はそこまで厳しくないけど、初老の先生が多いため採点スピードはかなり劣る。

……では保健体育は？

保健体育は採点が厳しいワケでもなければ、採点スピードも速いわけでもない。

そう、保健体育の先生の一の特徴、それは運動能力と行動力！

「・・・・・・・・Fクラス土屋康太」

「キ、キサマ！」

「Bクラス根本に保健体育勝負を申し込む」

ムツツリー二と一緒に教室に飛び込んできたのは体育教師の大島先生。

俺達が近衛部隊をひきつけたために護衛が居ない根本。もはや保健体育でムツツリー二の敵じゃない。

「・・・・・・・・サモンツ」

Fクラス 土屋康太 VS Bクラス 根本恭二

保健体育 441点 VS 保健体育 203点

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り落とした。

「戦争終結！勝者Fクラス！」

そして鉄人が壊れた壁に頭を抱えながらも、そうコールして、このBクラス対Fクラスの試召戦争はFクラスの勝利で幕を閉じた。

第十五問

「さて、じゃあ戦後対談といくか、負け組み代表さん？」

「・・・・・・・・」

雄二が根本に話しかけるが、根本は黙って床に座り込んでいる。さつきまでの態度とは大違いだ。

でも、これでBクラスの設備が手に入る！

「本来なら設備を明け渡してもらい、Bクラスには素敵なFクラスの設備をプレゼントするところだが、特別に免除してやっても構わない」

そんな雄二の発言を聞くと、周りが一気にざわめき始めた。もちろん、俺も驚いた。

「雄二、コイツにはFクラスがお似合いなのになんで交換しないんだよ？」

「みんな落ち着け、俺達の目標はあくまでAクラス。ここがゴールじゃない」

「そうだけど……」

「ここはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件を呑めば解放してやるつもり」

まあ雄二の性格だし仕方ないといえば仕方ないのかな。Dクラスの時もそうだったし。

Fクラスの連中も俺と同じことを思ったのか、みんな納得したような表情を浮かべていた。

「……………条件はなんだ」

根本は呆気にとられたように雄二に問う。

「条件？それはお前だよ、負け組み代表さん」

「俺、だと？」

根本が驚くようにして雄二に言う。

「ああ、お前には去年から散々いろんなことをやってもらっていて、正直目障りだったんだよな」

凄いいい様だけど、俺やここにいるほとんどの生徒もきつと同意していると思う。

それだけのことを根本はやってきてるし、本人も言い返せないってことは多少自覚はあるんだと思う。

「そこでBクラス全員にチャンスだ。Aクラスに行つて、試召競争の準備ができていると宣言してこい。そうすれば今回は見逃してやってもいい」

すると再び教室がざわめいてきた。

「……………それだけでいいのか？」

根本は拍子抜けしたというか、疑うように問いかける。

「ああ。Bクラス代表がこれを着てさっき言ったことをしてくれば、特別に見逃そう」

そう言って雄二が取り出したのは、先ほど秀吉が双子の姉になりますために着た女子用の制服。

雄二、お前が友達でいてくれて本当に良かったと思う。

うん、絶対に敵に回しちゃいけないヤツだ。

「バ、バカを言うな！この俺がそんなふざけたマネを……！」

「Bクラス全員で必ず実行させて見せる！」

「任せて！絶対にやらせてみせる！」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

試召戦争の時以上に、Bクラスにまとまりが見えるのは気のせいじゃないだろう。

これを見るだけで根本がどんだけのことをしてきたのかが、容易に想像できる。

「じゃあ決定だな」

「よ、寄るな！変態！ぐふう」

「とりあえず黙らせました！」

一瞬で代表である根本に見切りをつけたBクラス男子。君はきっとこれから社会に出ても通用すると思うよ。

「じゃあ明久、着替えを頼む」

「了解っ」

そして明久はぐったりと倒れている根本に近づいて、無理矢理着替えを始めた。

338

〈明久Side〉

「うーん、これどうやってやるんだろっ?」

雄二に頼まれて、というか事前に僕にやらせてくれっていったおい

ただ、根本君の着替えをしている。

ただ、男子の制服と違って女子の制服はよく着せ方がわからない。

秀吉はさつきすんなり着替えていたけど、やっぱり何度か着ているのだろうか。

「私がやってあげるよ?」

Bクラスの女子の一人が名乗りを上げて、そう提案してくれた。

「ありがとう。折角だから、かわいくしてあげて」

「無理無理。土台が腐っているから」

酷い言われようだ。

「じゃあよろしく」

僕はその女子に根本君の着替えを任せて、彼の制服のズボンを持ってその場を離れた。

多分、この辺に……。

ごそごそとズボンのポケットを漁る。すると見覚えのある封筒が出てきた。

姫路さんの封筒だ。それを僕は自分のポケットの中に入れた。

さて、この制服どうしようかな。 聡に処分を任せようかな。

きつと聡のことだし、制服を処分するだろう。

そしたら根本君は女子の制服で帰ることになるのかな？帰る途中に何度か警官に声をかけられそうだ。

そんなことを考えながら、皆より一足先にFクラスへ戻る。

そして着くなり、ポケットに入れておいた姫路さんの封筒を取り出した。

「落し物は持ち主にと……」

姫路さんの席の卓袱台に置いてあったカバンに入れておく。

勝手に見たりしたら可哀想だし、それにもしその手紙の相手が聡や雄一だったらそいつを殺しかねないからね。

とりあえずこれで作戦完了つと。

「吉井君！」

「ふえっ!?!?」

姫路さんが今にも泣き出しそうな顔でこちらを見ている。

「違うんだ、漁ろうとしてたわけじゃなくて……」

必死に容疑を否定する僕。だけど、次に姫路さんがとった行動は誰にも想像できないことだった。

「ほわぁっつとー!？」

「あ、ありがとうございます!……私、ずっつとどろいてい
いか、わからなくて、」

いきなり、姫路さんが僕の正面から抱き着いてきたのだ。

どうしていいのかわからないのは僕の方だ。もしかして新手の陽動作戦!?

「とにかく落ち着いて、泣かれても困るのはこっちだよ」

「は、はい……」

とりあえず動揺を取り戻すために姫路さんを引き離す。

ってなんてことをしてしまったんだ僕はっ!こんなチャンス二度と無いのに!

「いきなりすいません……」

涙目をこする姫路さん、そんな些細な仕草が可愛すぎる！

ああっ！言いたい！もう一度抱きついて欲しいって言いたい！

「も、もう一度……」

「はい？」

しまった！思っていたことが思わず声に出してしまった！もう一度抱きついて欲しいなんて言ったら僕は変態扱いで、警察行きだ。

「あ！待ってください！」

くっ、やはりカバンを漁った変態という疑いと、壁をもう一度壊したいなんていうテロリストがいうようなセリフの恥ずかしさのあまり逃げ出したかったけど、裾を握って引き止められた。

「な、何かな？」

「あ………」

やはりこのまま警察行き？いや、ここは一回先生を呼んでその指導を受けるのかな？それならもう慣れてるから大丈夫だけど………

いや、良い病院を紹介してくれるとか？先ほどの発言はどう見ても正常な人間が言うセリフじゃないし……。

「手紙、ありがとうございました」

「え？き、気づいてたの？」

「え？気づいてないと思ってたんですか？」

今までにない恥ずかしさだ。

「ああ、いや、なんでもないよ。根本君の制服からたまたま姫路さんの手紙が出てきただけだよ」

「それ、嘘ですよな？」

「いや、そんなことは……」

「やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験で体調不良で退席した私のことだって、『具合が悪くて退席しただけでFクラス行きはおかしい！』って言うてくれましたし……」

思い出せばそんなこともあったなあ。

結局あの時は体調管理も学校生活の一環だなんて言われて、聞いてもらえなかったんだけどね。

「それにこの戦争だって、私のためにやってくれているんですよね？」

「え！？いや、そんなことは！」

「ふふ、ごまかしてもダメですよ。自己紹介の途中で先生が退席した時、吉井君と坂本君が廊下に行くまで一緒にいましたし、何か話してるのも見てましたから」

たしかに、あの時は僕と雄二と聡と姫路さんの4人で話してたとき、僕が雄二を廊下に呼んで話したんだっけ。

それなら、もうごまかしようがない。

「凄く嬉しかったです。吉井君は小学校の時からずっと優しくて・・・」

な、なんか妙な空気だ。こんなに感謝されるなんてことがあんまりなかったし、ましてや相手は姫路さんだし・・・

とりあえず、この雰囲気。僕には耐えられない！何とか話題を変えよう！

「その手紙、見てないけど、うまく行くと良いね」

「あ・・・。はい、がんばりますっ」

そんな僕の言葉に応えたのは、姫路さんの満面な笑み。そんな笑顔

を見れるだけで、僕は幸せだと思っ。

「じゃあ、みんなのところに行こうか。廊下も騒がしいみたいだし」

「はいっすねっすね」

そして僕と姫路さんはみんなのいるBクラスへと再び足を運んだ。

あの後、結局根本は一致団結したBクラスに無理矢理女子の制服に着替えさせられ、Aクラスへ戦争の準備があることを伝えに行った。

きつとこれから根本はこれから消えることのない痛みと過ごしていくわけだけど、少しは懲りてマシになるだろう

そしてその後、壁を壊した主犯である俺と明久は職員室で多くの先生から注意を受けていて、結局帰れたのはまた先日と同じ日が沈んでからだった。

そんなハードな2日間を過ごし、その翌日は点数補充で、いつもなら楽じゃないはずだが、最近の忙しさに比べたらなんてことのない気がした。

そして二日後の朝。

いよいよ残りはAクラスのみとなったFクラスは、代表である雄二から、対Aクラス戦の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能といわれていたにも関わらず、ここまで来れたのは間違いなくみんなの協力のおかげだ。感謝している」

壇上で雄二がそんなことを言っている。なんていうか、雄二らしくない発言だ。

「どつしたの雄二？らしくないよ」

「ああ、自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の気持ちだ」

まあたしかに、このDクラスとBクラスの戦争は雄二の作戦と姫路さんの力だけでなく、みんなの協力があつたからこそ勝ち取れた勝利だったと思う。

でもそんなことを雄二に言われると、なんだが自分だけのことを言われてるわけじゃないのに、胸が熱くなってくる。

Fクラスが正直よくここまでこれたと思う。

「ここまで来た以上、何が何でもAクラスを倒したい。勝って、生き残るには勉強だけがすべてじゃないってことを教師やAクラスの連中に見せ付けてやりたいと思う！」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

最後の戦の前にみんなのモチベーションも上がっていて、クラスの気持ちも1つにまとまっていた。

「そこで、Aクラス戦の作戦だが、この戦いは一騎打ちで決着を着けたいと思う」

一騎打ち? まあたしかにAクラスはBクラスやDクラスとは桁違いで、まともにやっても今まで以上に苦戦を強いられると思うけど、一騎打ちでも今まで通り行かないのは目に見えている。

『べじいじいことだ？』

『誰と誰が戦った？』

『それで勝ち目はあるのか？』

「落ち着いてくれ、それを今から説明する」

雄二が机をバンバンと2回ほど叩いて、クラスを静まらせる。

「やるのはもちろん、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子さんは、Dクラス戦の時も利用させてもらったけど、学年主席で学力は2学年1の実力だ。

一騎打ちってことなら普通は代表VS代表だろうけど、Fクラスからは姫路さんじゃなくて雄二が出るのか？

雄二はFクラスで代表だけど、正直悪知恵や作戦を考えたりすること以外はバカそのものだ。

そこで浮かんでくる疑問は一つ。

「バカな雄二で勝てると思っていあああ!？」

突然カッターが飛んできて頬にかすり、一滴の血が床にたれた。殺す気か!?

「次は耳だ」

殺す気みたいだ。

「まあ聡の言う通り、翔子は強い。まともによりあえば勝負にならないかもしれない」

それを認めるのなら、カッターを投げないで欲しい。

「だが、それは今までの戦いでも同じこと。普通にやりあえば俺達

じゃ勝ち目はなかったんだ」

まあたしかにDクラス戦もBクラス戦も、作戦がなければ勝負にならなかったかもしれない。

でもこうしてFクラスは勝ち進んできている。

「今回だって同じさ。俺が翔子に勝ち、FクラスはAクラスの設備を手に入れる。俺達の勝ち揺るがないさ」

そう自信満々に言う雄二。なんとというかここまで行くとは尊敬するな。

「俺を信じてくれ。過去に神童とも言われた実力を、皆に見せてやる！」

「「「「「おぉーっ！」「」「」

最初は勝てるはずが無いと思っていた試召戦争を勝利に導いてきた
雄二の言葉。

いまやこのクラスに雄二のやり方に反対する生徒は出てこない。誰
もがみな、雄二のことを信頼している。

「あの、坂本君」

この盛り上がりの中、姫路さんが雄二に話しかけた。

「なんだ？姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

そういえば、確かに雄二は霧島さんのことを翔子って名前で呼び捨てで言っている。

高校生にもなつて名前と呼ぶなんて、俺と美波のように幼馴染か、または彼氏彼女の関係ぐらいしか考えられない。

でもまさか、このバカな雄二が才色兼備の霧島さんと良い関係にあるなんてことはないよな……？

「ああ、翔子とは幼馴染だ」

「総員狙え！」

明久の指示で姫路さんと美波と秀吉、そして当事者の雄二を除く4人が揃って上履きを雄二に向けて構える。

「なっ！？なんで明久の号令でみんなが急に上履きを構える！？」

「黙れ男の敵！何か遺言はあるか？」

「俺が何をしたと言っただ！？」

男子生徒の意見は言っまでもなく満場一致。

ああ。団結力って素晴らしいよ。

「あの、吉井君」

「聡」

そんな一触即発の状態の空気の中、姫路さんが明久、美波が俺に話しかける。

「何？姫路さん？」

「ん？何？」

「「聡（吉井君）は霧島さんが好みなの（なんですか）？」」

姫路さんと美波の質問は偶然にも同じものだった。

「そりゃまあ、美人だし……」

「うん、頭も良いし美人だしスタイルも良いし。これ以上の人いないでしょ」

「……」

「え？なんで姫路さんは僕に攻撃態勢を取るの！？」

「美波！なんで教壇なんていうものをこちらに投げようとしてるんだ！」

「まあまあ、皆落ち着くのじゃ」

命の危機を秀吉に救われる。さすがはお嫁第一候補だ！

「む、秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になって考えてみると良い。相手はあの霧島翔子じゃ、男の

雄二に興味があるとは思えないじゃろ」

あ、確かに……

霧島さんはあんなに美人でスタイルも良いし頭も良いのに、周りには男子がまったくいない。

聞く話によれば、振られた人数は2学年の男子3分の1ぐらいの人数だとか。

「むしろ、興味があるとすれば……」

「確かに……」

クラスの視線が姫路さんを集まる。

「な、なんですか？私何かしましたか？」

慌てる姫路さん。清水美春のような異常な人ならともかく、普通の人なら間違いなく美波よりスタイルの良い姫路さんを取るだろう。

たしかに何もして無いけど、何かされる可能性は大なんだ。

「まあ、俺と翔子が幼馴染だということが、この戦いの大きな鍵を握っているんだ」

幼馴染という立場が気になるけど、霧島さんは女の子が好きな見た

いだし、ここは見逃そう。

「俺はそれを利用してアイツに勝ってみせる。そしたら俺達の机は」

「『『『システムディスクだっ！』』』』」

「ねえ聡」

「なに？」

「なんで霧島翔子の幼馴染の坂本がみんなから羨ましがられて、私と幼馴染のアンタは羨ましがられないの？」

「はっは、なんでだろうね」

「ほんと、おかしな話よね」

「多分、美波には魅力が足りな
痛あつ……！腕がもげるよ
うに痛い！」

第十六問

「一騎打ち？」

「ああ、Fクラスは試召戦争としてAクラスに一騎打ちの勝負を申し込む」

恒例となった宣戦布告。

今回はいつもと違い、雄二、秀吉、ムッツリーニ、姫路さん等の首脳陣が勢ぞろいで来ている。

「……毎回こうしてくれれば俺や明久は毎回死ぬ物狂いで宣戦布告しなくて済んだんじゃない？」

「うーん、何が目的なの？」

現在俺達の前で交渉を行っているのは秀吉の双子の姉の木下優子さん。

秀吉をそのまま女の子のようにしたって感じで、とても可愛い美少女。

「もちろん、俺達の勝利が目的だ」

たしかに、Fクラスの勝利が目的なのは目に見えているけど、相手側が疑うのは仕方が無い。

下位クラスの俺達が、一騎打ちで学年主席である霧島さんに勝負を

挑むこと自体が不自然だ。

当然、相手側は何か策があるとして考えているだろう。

「面倒な試召戦争を気軽に終わらせることができるのは有り難いけどね。だからといってリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな」

予想通りの返事。さすがはAクラスといったところかな。

これからが交渉の腕の見せ所だ。

「ところでCクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間はとられたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

秀吉の挑発によってAクラスに、Fクラスがテストを受けている間に宣戦布告をしたCクラス。

その勝負は半日で簡単に決着が着いたみたいだ。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって昨日きてたあの変な人の……」

あの変な人とは根本のことだろう。

「ああ、あれが代表をやっているクラスだ。まだ宣戦布告はされて無いみたいだな」

「でもBクラスはFクラスに負けたはずだから、三ヶ月間は宣戦布告できないはずだね？」

その通りで、試召戦争で負けたクラスは3ヶ月間、罰として宣戦布告を行うことができない。

これは負けたクラスがまたすぐ勝負を申し込んで、泥沼化させないための配慮らしい。

「対外的にあの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになっていてな。言っておくがDクラスもだぞ……?」

これは設備を入れ替えなかったからならではだ。

「それって脅迫?」

「人聞きの悪い、ただのお願いだよ」

「うーん……わかったよ。何をたくらんでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないし、その提案受けるよ」

「本当か?」

意外だ。もつと慎重に来ると思ったのに。

やっぱりAクラスは試召戦争に勝っても何も無いから、なるべく早く戦争を終わらせたいんだろう。

「だって、あんな格好をした代表のいるクラスと戦うのなんて嫌だもん……」

根本の女装が、うちにとって良い影響を与えてくれたみたいだ。思わぬ収穫だ。

「で、こっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、お互い5人ずつ選んで、一騎打ち5回のうち3回勝ったほうが勝ちなら、受けてあげてもいいよ」

やはりそううまくはいかないか……。

でもうちには姫路さんもいるし、保健体育のエキスパートも一人いる。

5対5でも、まともにクラス単位でやりあうよりは勝率が高いかもしれない。

「そうか、それならその提案受けても良い」

雄二も同じことを考えたみたいで、その提案で決まりそうだ。

「ホント？嬉しいな」

秀吉の姉は雄二の言葉を聞くと嬉しそうにそう言った。

うん、秀吉に似てとっても可愛いけど、なんだろう。秀吉の方が可愛いような気がするけど……？

「君、椎名君だっけ？何か失礼なこと考えていなかった？」

「あはは、そんなわけではないさ」

この勘の鋭さ……誰かに凄く似ているような気がする。

「けど、勝負の内容はこちらで決めさせてもらおう。それぐらいのハ
ンデがあってもいいだろ？」

「え？うーん……」

なるほど、科目の指定がこちらでできるなら、かなり有利に戦える
だろつ。

一騎打ちで科目を選ばせるなんてことじゃ聞いてもらえなかっただ
ろつけど、5対5なら聞いてもらえるかな？

「……受けても良い」

「うわっ！」

「雄二の提案……受けてもいい」

突然現れた、凜とした声。

いつの間にか近くに来ていた霧島さん。気配を感じずに思わず明久が声に出していた。

「あれ、代表、良いの？」

「……その代わり条件がある」

「条件？」

「……………うん」

そう頷くと、霧島さんは姫路さんの前に来てその顔をじっと見て観察した後、再び雄二に視線をうつして言い放つ。

「……………負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

何でも言うことを聞く……………さっき姫路さんのことをじっくりと見て観察してたのは……………まさか！

こゝ、これは姫路さんにとって貞操や人生観の危機だ！

ど、どどどどしよう！そんなことになったらドキドキして夜も眠れな
い！

そして、隣にはカメラを構え今か今かと待ち構えているムツツリー
二の姿。

「ムツツリーニ！まだ早いよ！というか負ける気満々じゃないか！」

なんてことだ。こんなことが知れたらFクラスの連中は何が何でも
負けにくるだろう。

まさか、これも霧島さんの狙い？恐ろしい女だ！霧島翔子！

「じゃあこうしよう？勝負内容は5つのうち3つはそっちが決めて良いから、2つはこっちで決めさせて？」

「わかった。交渉成立だ」

「ゆ、雄二！何を勝手に！姫路さんがまだ了承してないよ！」

「そっだよ！クラス代表だからって勝手に決めていいわけないじゃないか！」

これは姫路さんの問題だ。

「心配するな、姫路には迷惑はかけないさ」

自信満々な雄二の言葉。そこまで勝つ自身があるのだろうか？

「……勝負はいつ？」

「そうだな、10時からでもいいか？」

「……わかった」

なんだろう、霧島さんは独特な話し方で、まるでムツツリーニみた
いだ。

「よし。じゃあ交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「みんなに伝えないといけないからね」

そして交渉を終えAクラスを後にする。

クライマックスが、すぐそこまで迫っていた。

第十七問

「では両クラス準備は良いですか？」

最近は試召戦争で今までよりもまた一層お世話になっている、二年Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務めてくれることになった。

知的なめがねに、タイトスカートから伸びる細く長い足が、とても綺麗な先生だ。

教科も対戦カードが決定するから指定するわけだし、どの強化でも扱える学年主任の先生が立会人をしてくれると手間が省ける。

「ああ」

「……問題ない」

両クラスの代表がそう合図を告げると、いよいよ緊張感が高まってきた。

「それでは一人目の方どうぞ」

「じゃあアタシから行くよ」

Aクラスからは秀吉のお姉さんである木下優子さん。

対するコチラは……

「ワシが行こう」

秀吉が名乗りを上げる。

秀吉といえは成績はあんまりよくないけど、かなりの演技派で、敵が姉だからといって動揺することもないだろうし、きっとお姉さんの集中力の乱し方を知っているはずだ。

この勝負、秀吉がどう相手の集中力を乱せるかで勝負が決まってくるはずだ。

頼むぞ、秀吉！

「とじろでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

Cクラスの小山さん……？たしか代表で根本の彼女だったよね。

その人がどうかしたのだろうか？

「じゃーいいや、代わりにちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうする気なのじゃ？姉上」

そう言って、秀吉のお姉さんは秀吉を連れて、一旦廊下へと姿を眩ませた。

『姉上、勝負は どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何をしてくれたのかしら。どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしたことになってるのかしら？』

『はっはっは、それならワシが姉上の本心を推測して あ、姉上！ちがっ！その間接はそっちには曲がらない……！』

恐ろしい会話を終えて、秀吉のお姉さんが教室に入ってきた。何故かハンカチで返り血を拭きながら。

「クラス代表ってことは、この前秀吉が姉に成りきって挑発した人か……！」

「秀吉は急用だから帰るってさ、代わりに人出してくれる？」

「い、いや、うちの不戦敗で良い……」

さすがの雄二もこういうしかなかったみたいだ。

「そうですか、それはまずAクラスが一勝つと」

高橋先生がノートパソコンをいじって、壁一面にもなる大きなディスプレイに結果が表示された。

Aクラス 木下優子 VS Fクラス 木下秀吉

生命活動 WIN VS DEAD

秀吉はきつとまだ生きているはず！いや、生きていてくれ！

「では次の方」

「私が行きます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからはめがねをかけていても知的な感じがする佐藤美穂さん。

対するFクラスは誰で行くつもりだろうか？

「ここで負けると2敗・・・厳しいな」

たしかに、5戦で3戦勝ったほうが勝ちというルールで最初の2戦をあっさり落としてしまうのはどうみても負けフラグだ。

「姫路、物理はいけるか？」

「は、はい、大丈夫ですっ」

「よし、じゃあ任せたぞ！」

ここで切り札投入か、でも最初の2戦で2敗するよりは、ここで確実に一勝しておきたい。

2勝2敗で最終戦の代表VS代表になれば、雄二の考えによれば勝てるらしいし。

Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 姫路瑞希

物理

398点

VS

425点

400点オーバーなんて……さすがは姫路さんだ。

隣で雄二も満足そうに姫路さんの戦いぶりを見ていた。

「1勝1敗です。それでは3人目の方」

その高橋先生の合図を聞くとムッツリーニが無言で立ち上がり、前へと進んでいった。

ここで科目の選択権がこちらにあればほぼ勝ちは決定だ。

ムツツリーニは総合科目の点数のうちの80%近くを保健体育でとっている。まさに保健体育のエキスパート。

その単体教科なら、いくらAクラス相手でも勝てるやつはそうそういないはず。

「それじゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは薄い黄緑色の髪をショートカットにしている、ボーイッシュな感じの女の子が出てきた。

あんまり……、というか一回も見たことないような人だけど……

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

なるほど、だから見たことが無いのか。

なんというか、女子の制服を着ているから女子に見えるけど、男物の服を着せても男子として似合いそうだ。

「科目は何にしますか？」

高橋先生が科目選択権のあるFクラス側の生徒、ムッツリーニに尋ねる。

「……保健体育」

ムツツリーに最大の武器がコールされる。

「キミ、土屋君だっけ？保健体育が得意みたいだね？」

工藤さんがムツツリーに話しかける。転入生だから、ムツツリー
の保健体育の実力を知らないのかな？随分と余裕みただけど。

「でもボクだって結構得意なんだよ？・・・キミと違って実技で
ね」

じ、実技・・・！？

多分話しの流れからして、体育の方の運動の実技が得意というわけじゃなさそうだ。保健の方の実技というと……

「……実技」

ムツツリーニも同じことを考えているみたいだ。大丈夫かな、勝負が始まる前にやられないよね？

「……ぶはっ」

「ムツツリーニ！」

しかし次の瞬間、ムツツリーニが大量の鼻血を出して床に倒れた。

よくもムツツリーニに！なんで酷いことを！

「キミ、椎名君と吉井君だっけ？キミ達が選手交代する？でも勉強
苦手そうだよ。保健体育でよかったらボクが教えてあげるよ。も
ちろん 実技だね」

「「「ぶはっ！」「」」

今度はムツツリーニだけでなく、ムツツリーニを支えに行った俺と
明久までもが鼻血を出して倒れてしまった。

工藤愛子・・・・・・・・なんてヤツだ！

「吉井君！」

「聡！」

明久には姫路さん。俺には美波がそれぞれ寄ってくる。

よ、良かった。心配してくれたのか。

「余計なお世話よ！聡には一生そんな機会ないから！」

「そうです！吉井君には永遠に必要ありません！」

「島田に姫路。聡と明久が揃って死ぬほど悲しそうな顔をしているのだが……」

それは、俺と明久には一生恋人ができずに、一生独身だという通告なのだろうか……

いつか来るはずだよね？そういう機会、来るよね？！

そんなことを思っていると、ムッツリーニが一人で立ち上がった。

「ムッツリーニ……?」

「大丈夫、これしき……」

鼻血が止まらずに蛇口をひねったかのように流れ出ているこの状況を大丈夫というのは少しばかり無理があると思うんだ。

でも、ここはムッツリーニに任せるしかない。ここでなんとしても一勝してくれ……！！

「では試合開始」

そんな高橋先生の合図とともに現れるお互いの召喚獣。

ムッツリーニはもう何回か見たけど、おなじみの忍者のような格好の召喚獣。いかにもデフォルムムッツリーニだ。

それに対し、工藤さんの召喚獣はかなり巨大な斧を武器として持っている。しかもある程度の点数以上を取るともらえる指輪までついている!?

「実践派と理論派。どっちが強いか教えてあげるよ」

工藤さんがそう艶っぽく言うと、指輪を光らせながら召喚獣が走り出した。

その召喚獣はかなり早いスピードでムッツリーニの召喚獣へと詰め寄っていった。

「それじゃバイバイ。ムッツリーニ君!」

そして斧をムッツリーニの召喚獣へと振りかざす。ムッツリーニ!

危ない！

「……加速」

「え……？」

そんなことを思った直後、ムッツリーニの指輪が輝き、先ほどの工藤さんの召喚獣のスピードの何倍も早いようなスピードで相手の召喚獣の射程外にいる。

「……加速終了」

そうムッツリーニが言うと、工藤さんの召喚獣は倒れていた。

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太

保健体育 446点 VS 576点

さすがはムツツリーニ。それにしても、5000点オーバーって……

「そ、そんな……このボクが……」

工藤さんが床に膝を着く。たしかに得意なことでも人に負けることほど精神的に来るものは無いと思う。

「これで2対1ですね。次の方どうぞ」

高橋先生は淡々と作業を進める。

自分のクラスであるAクラスを応援したりしないのかな？

「僕が行こう」

Aクラスから歩みだしたのは、学年次席である久保利光。

すらっと高い身長に眼鏡をかけていて、いかにも優等生という感じがする生徒だ。

同じクラスになったことはないし、部活も違うから話したこともそんなにないんだけど、なんかやたらこちらを見ているというか、たまに見るとよく目が合う。

何故だか、その瞬間に寒気がするような気がするけど、気のせいかな？

「よし、じゃあ頼むぞ。聡」

「え？この場面で俺が出るの？」

俺は観察処分者になるくらいだし、Fクラスの中でも成績が決して良いほうじゃない。

なのになんでここで俺が出るんだ？秀吉みたいに相手の集中力を乱

すようなことできないし。

「俺は秀吉と違って相手の集中力を乱すようなことできないぞ・・・」

「そんなの必要はないだろ。・・・俺はお前を信頼しているからな」

信頼・・・か。そんなことを言われたら、それに応えるしかないじゃないか。

「やれやれ、それは俺に本気を出せってこと？」

「ああ。もうバカやって隠すのも必要ないだろ？本気を見せてやれ」

「やれやれ……。仕方がないね」

『おい、椎名ってまさか本当は凄いヤツなのか?』

『まさか、いつものジョークだろ?』

Fクラスからそんな声上がる。

まあ仕方がないかな。今まで散々バカやってきたからね。

「し、し、椎名君、き、君は……。!」

相手の久保は動揺しているのか、噛み噛みな感じで俺に戦く。

さすがは学年次席と言った所かな。なかなか良い観察力だと思っよ。

「そう、俺は今まで本気なんて出しちゃいなかったよ」

「そ、それじゃあキミは……!」

「そう。実は俺」

空気を思い切り吸って、この場にいる全員に聞こえるように告げる。

「血液型、A型なんだ」

Aクラス 久保利光 VS Fクラス 椎名聡

総合科目 3934点 VS 746点

おかしい。本気を出したのに負けるなんて。

「このバカっ！血液型なんて召喚獣バトルに関係ないでしょ！」

「痛っ！みんなからよく血液型B型で言われるん って美波、フ
イードバツクでただでさえ痛いのにこれ以上体を痛みつけないで！」

学園次席の壁は厚かった。5倍以上も点数が離れているなんて。

「椎名君、A型なのか……。ボクはB型だから、子供は多分AB型か……。」

なんだろう。久保の顔が赤くなっていて、春で今日は割りと暖かい日なのに、とても寒気がするのは。

「では、最後の一人どうぞ」

「……はい」

最終決戦。相手はAクラス代表。霧島さん。

そしてこちらのクラスからはもちろん

「俺の出番だな」

坂本雄二。こいつしかいない」

「教科はどうしますか？」

「勝負は日本史の限定テスト対決をお願いします。内容は小学生レ

ベル。方式は100点満点の上限あり」

雄二がそう自慢有り気に告げると、Aクラスからだけでなく、我等がFクラスからも声上がる。

試召戦争はあくまでテストの点数を用いた戦い。だからテストを用いた勝負なら、教師が認めればできることになっている。

それにしても小学生レベルの日本史？雄二が日本史得意なんてことも聞かないし、ましてや小学生レベル。

お互い100点とって当たり前の戦いじゃないか。

「わかりました。では試験を用意します。対戦者は教室に集合してください」

その合図を聞いて、お互いのクラスの代表がそれぞれクラスの群れへと一旦引き返した。

「どづいつこと？雄二」

「小学生レベルのテストだと、2人とも100点をとって当たり前じゃない？」

「それじゃあ引き分けじゃない」

「いいえ、小さなミス1つで負けるってことですよ」

なるほど、姫路さんの言う通り、小さなミスが1つでもあったほうが負ける。それが雄二の狙いなのか？

「その通り、学力じゃなく、注意力や集中力の勝負になる」

「雄二……それで勝てるの？」

「心配するな。勝算はある。翔子は1度覚えたことは忘れないんだ」

「それじゃあ暗記力勝負の日本史は尚更不利でしょ」

「いや、そこが落とし穴だ。アイツは大化の改新のことを無事故の改新625年と間違えて覚えている。もしその問題が出れば俺は……勝てる」

なるほど、幼馴染という点をこの時のために生かしておいたのか。

もうこうなったら、その問題が出るのを祈ることぐらいしか、俺達にはできない。頼む！出ていてくれ！

第十八問

「それでは始めてください」

高橋先生の合図でテストが始まった。

「いよいよ……ですね」

「でも、もしあの問題が出ていなかったら雄二はどのようなものじゃ？」

「注意力や集中力が劣れば、雄二の負けだね」

「でも、もしでていたら・・・!」

もし出ていたら、俺達の勝ちだ!

親切なことに、同じ問題がモニターにも映し出されている。

問 次の【 】に正しい年号を入れなさい。

【 】年 平城京に遷都

【 】年 平安京に遷都

【 】年 鎌倉幕府設立

【 】年 大化の改新

「あ……!!」

出ていた！大化の改新が、しかも年号を答える問題で！

い、いや、でもここで安心するにはまだ早い。

小学校の頃に教えたってことは、もう新しく覚えなおしている可能性もある。

頼む！霧島さん、間違っていてくれ！

キンコーンカーンコーン

テスト終了のチャイムがなり、いよいよ運命の採点結果が発表される……。

「では、限定テストの結果を発表します」

この教室の空気……みんなもきつとドキドキしているんだろっ。

「Aクラス代表霧島翔子、97点」

『やったあああ！』

『Aクラス代表は満点を逃したぞ！』

『この設備が俺達のもになる！』

点数が発表されるなり、Fクラス生徒はお祭り騒ぎ状態。叫んだり、共に戦った戦友と肩を叩き合ったり。

それに対して、Aクラスはがっくりと肩を落とすもの。拳を地面にぶつけて悔しがるもの。涙を流すもの。

俺達Fクラスはついにここまで来たんだ。最初は正直無理だと思っ
ていたけど、みんなが自分の力を発揮した試召戦争。

「続いて、Fクラス代表、坂本雄二」

全てはこの時、この瞬間のために！

「53点」

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

「前よりも酷くなったじゃないか！」

「なんなんだあの点数は！」

試召戦争は結局3対2でAクラスが勝利した。

なので、俺達Fクラスは夢のAクラスのシステムディスクはおろか、卓袱台にすら及ばない、みかん箱という施設になった。

それというのも全てこのバカ代表のせいだ！

幼馴染だとか、大化の改新が出れば勝てるとか、散々ぬかしておいで！

「いかにも、俺の実力だ」

「自分が100点取らないと、作戦が役に立たないだろ！」

「まさかあんな伏線が潜んでいるとは意外だったな」

「自分は伏線になってどうするんだよ！」

「……雄二」

そんな反省会をしていると、このますますボロくなったFクラスに、先ほど雄二と激戦を展開していたAクラス代表、霧島翔子さんの姿が。

「……約束」

そういえば、勝ったほうの言うことをなんでも1つ聞くとかいう約束していたっけ……。

って、まさかそれって！姫路さんの貞操の危機が！！！！

「わかってる、なんでも言え」

雄二がそう言うと、霧島さんは案の定、姫路さんの前で立ち止まった。

「いけないよ霧島さん！女の子同士でなんて！」

明久、そんなこと言いながらレフ板を構えるんじゃない。

まあ俺もムツツリー二の構えているカメラからガン見してるけど。

「？」

姫路さんは何故霧島さんが自分の前で立ち止まったのがよくわからずにいるみたいだ。

姫路さん危ない！でもそう思ったとき、霧島さんが姫路さんから離れて、再び誰かの前へと向かって歩きだした。

そしてその後の一言は誰にも想像ができない一言だった。

「……雄二、私と付き合って」

「「「え？」「」」

俺と明久とムッツリーニは3人揃って驚きの声を上げる。

だってそうだろう。才色兼備の才女が霧島さんがいきなり告白？

しかもよりによって相手はあの雄二……………？

「やっぱりな、お前まだ諦めていなかったのか」

「……………私は諦めない。ずっと雄二のことが好き」

「その話は前何度も断っただろ？他の男と付き合う気は無いのか？」

「……………ない。雄二以外の男に興味は無い」

えーっと、とりあえず頭の中を整理しよう。

雄二と霧島さんは幼馴染。霧島さんは前から雄二のことが好き。話からして何度か告白をしている。

雄二はそれを何度も断っている。

なるほど……うん。

「雄二！キサマなんて贅沢な人間なんだ！」

「そつだ！学年主席で才色兼備な霧島さんと雄二で釣り合っても居ないじゃないか！」

「……殺したいほど妬ましい」

「ま、待て！俺は何にも！」

明久とムツツリーニも同じ答えに辿りついたのが、3人揃ってカッターナイフを構える。

雄二！生きて返さない！

「……だから雄二、これからデートに行く」

「ま、待て！きよ、拒否権は！」

「……約束だから」

「ぐあっ、やっぱりこの約束はなかったことに……！」

そんな言葉を残して雄二は霧島さんに襟の辺りをつかまれて連行されていった。

「「「……」」」

教室にしばしの沈黙が流れる。

あまりに急すぎる出来事にみんな言葉にできない。

「さて、遊びの時間は終わりだ」

呆然としているこのFクラスに野太い声。鉄人こと西村先生の声が響き渡る。

「あれ？西村先生、私達に何か用ですか？」

美波がそう西村先生に尋ねる。

「ああ、今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ
てな」

我がFクラスの部分を強調して言う。

って、え？我がFクラス？

「おめでとつ。お前達が戦争に負けたお陰で、福原先生から補習担当である俺に担任が変わるそつだ。これから一年間死ぬ物狂いで勉強できるぞ」

「「「なんだつて!?!?!」」」

俺と明久とムツツリーニが声を合わせて驚く。

担任が鉄人だつて！？それは毎日が鬼の補習のようなものじゃないか。

「いいか、お前達はよくやった。正直Fクラスがここまでやるとは思っても居なかった。だが、『いくら学力だけが全てじゃない』なんて言われても、その学力が武器になるのも事実だ。全てではないが、やらなくてもいいというわけでもない」

くそつ、雄二がきちんと100点をとっていればこんな説教受けなくて済んだのに！

「椎名に吉井。それに坂本の3人は特に念入りに指導してやるからな。なんせ観察処分者2人にA級戦犯だからな」

「そうは行きませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今までどおり楽しい生活をして見せます！」

「その通り！世界の果てまでだろうと逃げて見せますよ！」

「……お前達には悔いを改めるといふ発想は無いのか」

あるとでも思っていたのだろうか。

「とりあえず明日から毎日授業の他にに2時間の補習の時間を設けてやる」

授業の他に2時間も補習だと！？一日の六時間の授業でも限界寸前なのに八時間も勉強してられるか！

そんなことを思っていると、美波が俺の方に歩み寄ってきた。

「さあ、て、聡。補習は明日からみたいだし、約束どおりクレープを食べに行きましょうか？」

「それは週末だろ……？」

この前のBクラス戦の時のツケが今になって周ってきたか……！でも約束では週末のはずだ。

まさか2回も奢れってことか？仕送りはギリギリなのにそんなに奢ったら昼と朝を削らないといけないじゃないか……！

「よ、吉井君！良かったら映画見に行きませんか？」

「え、映画？でもお金が……ちょっと……」

隣では、姫路さんが明久にそう迫っている。

殺したいほど妬ましいけど、今はそれどころじゃない。今度の生活費の方がよっぽど大切だ。

441

「西村先生！補習今日からにしましょう！」

「そうそう！思い立ったが仏滅です！」

「『吉日』だバカ、まあやる気になっているのは嬉しいが」

鉄人がニヤニヤとしながら美波と姫路さんを見て

「無理することは無い。明日からにしよう」

そう無体な言葉を言い放った。

442

おのれ鉄人！こういう時に限ってそんなことを言いやがって！

「聡！そんなことを言って逃げよう立ってそうは行かないからね？」

美波は俺の制服のネクタイの辺りを掴んでそう言うってくる。

「こ、これは下手に美波を刺激したら、このまま首を絞められて人生が終わってしまう……！！」

「ははは、今月は仕送りがピンチだから今度ってことに……」

「そう言ったっていつもそういって誤魔化す気でしょうけどそうはいかないわよ」

「吉井君！映画に行きましょう！」

「えっと、姫路さん。僕もそうなる今月は塩水だけで生活すること……」

このままじゃ生活費が……！！

そんなことを思っていたけど、試召戦争で互いにこんなに頑張ったんだし、軽く打ち上げ代わりぐらいなら別に良いかもしれない。

今日行けば週末はなしにしてもらえばいいし、一人分ぐらいならきつと財布も頑張ってくれるはずだ。

そう、一日ぐらいなら……。。

「じゃあ、今日一日だけならいいよ」

「じゃあ、週末は葉月も連れて3人で行きましょうか」

第十九問目（前書き）

一応前回の『十八問』で、締りは良くなかったかもしれませんが、小説の一卷の内容が終わったことになります。

これからはオリジナルや短編番外編のようなものもちよくちよくはさみながらやって行きたいと思っています。

更新ペースも以前と比べてかなりマイペースになると思いますが、これからもよろしく願います！

第十九問目

試召戦争で何かと忙しかった一週間が終わり、やっと訪れた日曜日

普通の高校生の日曜日といえば、友達と遊んだり、部活をやったり、はたまた付き合っている彼氏彼女と会ったり。

一週間の中でも土曜日と並んで好きな曜日と言えるだろう。

もちろん、俺も土曜日曜の休みの日は一週間で一番好きな二日間だ。

そんな日曜日、俺は何をしていたかと……

「今日はここまで、帰ったらちゃんと復習しておくように」

Fクラスの仲間達と、変わったばかりである鬼担任、鉄人の補習授業を受けていた。

「はいはい」

9割以上が男子ということもあって、返事の声も低く、学力最低クラスということもあり、返事のトーンも低い。

だいたい家で勉強だなんて……このFクラスでやってるのは姫路さんぐらいじゃないかな。

復習よりも、俺は早く鉄人に復讐をしたい。

「はあ、腹減った」

そう独り言を残して卓袱台からみかん箱へとグレードアップ、いや、どうみてもダウンされた自分の席に伏せるように倒れる。

今日の補習は午前までだけど、みんな弁当を持ってきているみたいだ。

やっぱり家で一人でカップラーメン食べるよりは、学校で仲の良い友達と食べたほうが何倍も良いからね。

気づけば俺や明久の周りにも、雄一、ムツツリー二、美波、秀吉、姫路さん、と、いつもの面子が勢ぞろいしていた。

「ふう〜、やっと終わったよ〜」

そう言っただけの隣の席でだらけているのは、明久。

学年一、いや、校内一、むしろ日本一のバカで、俺と同じ観察処分者。

でも何故か、このFクラスの紅一点である姫路さんから好かれてい

「聡、またお昼は買ってないのかの？」

おなじみの爺言葉と、誰もが女子？と疑うような可愛い外見を持っている、秀吉が呆れたように言ってくる。

「今日はちょっとピンチで……」

試合戦争で負けた日と、昨日の土曜日。

二日も美波にクレープを奢らされることになるとは。

ましてや昨日なんて葉月ちゃんも一緒だったし……。

「……計画性が無い」

カメラの手入れをしながら少ない口数で話しかけてくるのはムツツリーニ。

プロも顔負けのカメラ技術と、性の興味と知識では他のみんなと比べ物にならないものを持っている。

君がもうちょっとと写真を安く売ってくれたら助かるんだけどね……

「美波、また今日も夜行くからおばさんに言っといて」

「まったく、ホント、土屋の言う通り計画性が無いんだから！」

誰のせいでその計画が壊れたと思っている。

同じ一人暮らしの明久と比べると、俺の仕送りはかなり少ない。

ゲームも漫画も何も買わずに、最低限度の生活をしていけばなんとか生活できるけど、今回みたいに思ってもいなかった支出が増えるのと、いつもこんな感じで、昼食も食べれないぐらいな貧乏な生活を送ることになる。

そのため、一人暮らしになってからこういう風にお金に困ったときは、夕食だけ隣人である美波の家でご馳走になっている。

おばさんも美波と血縁関係にあるとは思えないぐらいとても気さくな方で、毎日来てもいいと言っているけど、まあ毎日ご馳走になるのも悪い。

「なんか、失礼なこと考えてたでしょ？」

「いや、全然」

だから、こうしてお金に困ったときはお邪魔させてもらっている。

まあ夕食をご馳走してもらって代わりとこっちちゃんだけど、美波の妹である葉月ちゃんと遊んだりして、葉月ちゃんはよろこんでくれ

るんだけどね。

「……雄二、ご飯」

そして、日曜日にも関わらずのんびりとした昼休みのような時間をFクラスで味わっていると、Aクラス代表、学年主席の霧島翔子さんがこのクラスにたずねて来た。

才色兼備で何もかもが完璧な彼女だけど、男を見る目だけはなかったみたいだ。相手は雄二なんて……

でも今日は日曜日。Aクラスは当然補習なんてないだろうしなんてきているんだろう？

「翔子？なんで？Aクラスは補習なんてないだろ？」

雄二も同じことを霧島さんに聞き返す。

「一人で自習してた。雄二がいるなら日曜日でも来る」

「来なくていい」

「雄二が来ないなら平日でも来ない」

「それは問題あるだろ……」

相変わらず雄二に一途だ。この光景を見るたびに雄二を狩りたいという衝動に駆られている。

「明久は今日は弁当なのかな？」

「うん、たまにはね。」

キングオブバカという称号だけでなく、キングオブ貧乏の称号も持っている明久は、珍しく弁当を持ってきてるみたいだ。

「じゃ〜ん」

明久が自分で効果音をつけて弁当箱を開ける。

そこ弁当箱に入っていたのは……

「何それ？」

「67分の1のカップ麺」

かなり小さく一口サイズのカップ麺だった。というかよく見ないとカップ麺だっで見分けがつけられないぞ。

「67分の1？」

「半分の半分の半分の半分の半分の半分？」

「明久、それは64分の1だ」

「分数の計算は鬼門じゃのう」

たしかに分数の計算はゴチャゴチャするよね。あと少数とかもね。

みんながなんだかんだ言っ
て弁当を食べている時、俺は
みかん箱に伏せている。

見るとますます腹減るから
ね……。

はあ、この後みんなは帰れる
けど、俺は部活だよ……。
俺の身体、いつまでもつか
ない……。

460

「聡」

「ん？」

美波に呼ばれて、伏せたまま少し適当に返事を返す。

「そ、その、ウ、ウチの弁当分けてあげようか？」

「え？良いの！？」

これはありがたい。部活も大会が近いからみっちり練習するだろうし、少しでも多くカロリーや栄養をとっておきたいところだ。

「しょ、しょうがないわね！作りすぎちゃって弁当二個持ってきたから、一個食べる？」

「食べる食べるー！」

「ちょっと待ってね……」

そついうと美波は自分の席においてあるカバンを取りに行つて、その中をゴソゴソと漁っている。

美波も結構女の子らしいところがあるじゃないか。

でもなんかやたらと漁っている時間が長い。

そんな大きいカバンじゃないし、そんなにものがゴチャゴチャしているようには見えないけど……。

そして、もうしばらくすると、残念そうな顔で美波は戻ってきた。

「ごめん、家に忘れてきたみたい……」

「そんな……」

「せっかく作ってきたのに……」

そう言って落ち込んでいる美波。まあ仕方ないか……。

「いいよ。お弁当を作るだなんてそんな女の子らしいことをできると思った俺の考えが甘すぎて……頸椎が砕ける!？」

「持ってくるの忘れてただけって言うてるでしょ！」

け、頸椎があ！

「見え……見え……」

くそっ、ムツツリーニめ！友人を助けるよりも女の子のパンツを見るほうを選ぶとは！

「「ふん……」」

雄二と明久もムツツリーニほど堂々ではないが、チラッと見ようとしている。

「……雄二は見ちゃダメ」

「吉井君！見ちゃダメです！」

雄二は霧島さんから愛の目漬しを、明久は目を姫路さんの手によって塞がれている。

「ぬあゝ目が！目がああああ！」

「ひ、姫路さん！でも……これはこれで……」

雄二はとりあえず置いておいて、とりあえず明久は後でシバく必要

がありそうだ。

「相変わらずじゃのう……」

のんきにサンドイッチを食べながらこちらを見ている秀吉。そう、これが日常茶飯事で行われている。

そろそろ全身の骨や関節が逝かれそうな気がしてくる。

そんないつものFクラスの雰囲気の中。教室のドアが不意に開いた。

「あのく、バカなFクラスってここですか？」

声は聞くからに恐らく小学生程度。とりあえず声変わりをした高校生
生の声じゃない。高い声。

その声のする方を見ると、髪は2つにまとまっっていて、小柄で
可愛い女の子がいた。

「葉月!どうしたの?」

「あ!お姉ちゃん!」

そう、この子は島田葉月ちゃん、美波の妹。

たしか今は小学五年生だったっけ？

元氣そんな雰囲気や、勝気な目は姉である美波そっくりだ。

「あ！お兄ちゃんも！」

隣同士の付き合いである島田家だし、当然面識はあるし、夕食をこ
馳走になったときはいつも遊んでいる。

一応、お兄ちゃんって呼ばれている。そう呼ばれるたびに妹ができ
たという気になってくる。

「島田、聡、お前達家族だったのか？」

「んなわけないでしょ」

雄二がそう言うてくる。でも名字がどうみても違っただろ。

「お久しぶりですっ！お兄ちゃん！」

そう言うて俺の胸に飛び込んでくる。お久しぶりって言われても、昨日の夕食の時以来なんだけどね。

「久しぶり、葉月ちゃん」

そう言つて頭を撫でてあげると、とても気持ちのよさそうな表情を見せている。なんだか猫みたいで可愛いらしい。

「聡の妹なの？」

「葉月はウチの妹よ」

明久がそう聞くと、俺の代わりに美波が応える。

「はいっ、お兄ちゃんとは兄妹の関係じゃないです。お嬢さんですっ！お兄ちゃんとは結婚を前提としたお付き合いをしていますっ！」

「「「ええっ!?!」」」

するとみんな驚きの表情を浮かべる。

それもそのはず、俺だって始めて聞いたんだもん。

「ちょっと聡!ウチの妹にないを!」

妹思いの姉である美波がそう俺に言ってくる。俺が聞きたいぐらい
なんだけど。

「いや、それはきつと色々と誤解で……」

ボンッ

裁判で判決が下されたときに叩かれる小さなハンマーのようなものが叩かれた音がした。

それに気を取られている瞬間、そう、ほんの一瞬の間に、俺は何故か十字架に張り付けられていて、周りに異端審問会。通称FFF団のメンバー達に囲まれていた。

「これから異端審問会を行う」

「ちよ、何するんだ！」

「罪状、被告椎名聡は異端審問会の血の盟約に背き、自分だけ女の子と付き合うという大罪を犯した。それは事実には相違ないか？」

「「「「相違ありません」「」「」」

ボンッ

「被告。言い残すことは？」

「なんで弁護の前に遺言なんだっ！」

「有罪。死刑」

異端審問会会長の須川がそう言うと、FFF団の連中は一気に襲い掛かってきた。

ヤバイ！彼等なら本当に殺しかねない……！！

美波！秀吉！雄二！ちょっと助けてよ！

「お主何年生じゃ？」

「小学五年生ですっ」

「聡や明久よりしっかりしてるな」

友人が命の危険にさらされているというのに……なんて白状なヤツらだ！

「」「喰らえ！」「」

「ぐあああっ！」

その後数分ほど、異端審問会に散々しごかれた。

「で、葉月、どうして……」

俺が隣で燃え尽きてふらついても、何もお構いなしに話を進める美波。

でも何故だろう。慣れてはいけないと思うこの状況に慣れてきた気がするのは。

「そうでした！お姉ちゃん忘れ物！」

そう言って葉月ちゃんは青と緑の2つのお弁当を取り出した。

「うちのお弁当・・・ありがとう葉月！良かった・・・ちゃん
と2つ持ってきてくれたんだ。ほら聡、うちだってお弁当ぐらい作
れるんだから」

「なぐんだ、そうだったんですか。お姉ちゃんが珍しく早起きして張り切ってお弁当作っているからどうしたのかなぐって思ってたけど……お兄ちゃんに」

「な、何を言ってるのかしら。へ、変な子ね」

葉月ちゃんが全部言い切る前に、美波が葉月ちゃんの口を塞いだ。

朝早くおきて張り切ってたことは……ひよっとして俺のために作ってくれていたのかな？

そ、それって、美波が俺のことを気遣って、作ってきてくれたってこと……？

「ほう、そのお弁当、聡のために作ったお弁当じゃったのか」

「違うわよ！ウチが聡にそんなことするわけないじゃない。と、とにかくこれはただの余り物なんだから、聡のために作ったんじゃないんだからね！」

美波はそう言うと、俺に背中を向けた。

はは、そうだよね。まさか美波が俺のためにね……。

何期待していたんだろう。でもこれでカロリーは摂取できる。ありがたい。

「おや、どうしたのじゃ？姫路」

秀吉が先ほどから何かゴニョゴニョと可愛い仕草をしていた姫路さんに話しかけた。

女の子がこういつ仕草するのって、やっぱり好きな男の子に何かをするときだよな？

「い、いえ、な、なんでもないですっ」

そう慌てて応える姫路を見ると、ますます気になる。

何かわからなかったけど、手に持ってたものをすぐ後ろに隠したし。

「それ・・・お弁当」

お弁当だったのか・・・。サッカーやってて動体視力にはそこそこ自信ある俺が見れなかったのに、見えるなんてさすがはムッツリーニ。

でもきつと、その動体視力の鍛え方はきつと犯罪だと思っんだ。

「へえ、姫路も弁当作ってきたのか」

「は、はい、あんまり上手じゃないですけど・・・」

そう言っておずおずとして弁当を出した姫路さん。

こんなに可愛い子の子の料理、美味しくないはずが無い！

でもここでお弁当を出すってことは、自分が食べるように作ったんじゃないってことだよな？

自分が食べるのならそんな隠す必要もないわけだし。

となると、答えはひとつ。

「あの・・・実はこれ、吉井君に作ってきたんです！吉井君、できたらこれ、食べてくれますか？」

しかし明久はこの姫路さんの問いに答えることはできない。だって、すでに異端審問会の人達に捕まっているんだから。

「明久はいいのう」

「ホント、姫路さんに弁当作ってもらえるなんてね」

羨ましいことこの上ない。BGMとして明久の悲鳴が聞こえているけど、気にしないでおう。

「あ、あの、みなさんの分も作ってきたんです！良かったら食べて

くれますか？」

姫路さんがカバンから大きなパックを取り出していった。

なるほど、明久には特別に作ったけど、俺達の間も用意してくれていたのか。

嬉しい。うん、すごく嬉しいよ。でも……

「異端審問者2人の身柄を確保」

できれば、今は言うて欲しくなかったな。

そして明久、俺、ムッツリーニの3人は先ほどと同じように十字路に縛られている。

雄二？雄二はいうまでもない。霧島さんが『浮気は許さない』と云ってただいま調教中だ。

秀吉はもちろん、女の子なんだから何の問題もない。

「……俺を倒したら秀吉の写真が売れなくなる」

「ムッツリーニは解放しよう」

くそっ！ムツツリーニめ！でも異端審問会も異端審問会だ！それで
すぐに解放してしまうなんて！

俺も何とかしないと・・・うん、あれしかないか。

「みんな落ち着け。姫路さんに特別に作ってもらっていた明久にも
つと刑を与えるべきじゃないか？」

「ちよつと聡！」

「・・・たしかにそうだな」

「・・・姫路さんに特別に弁当を作ってもらっていた吉井は許せ

ない」

「とうわけだ。俺も明久に刑を与えたいと思っている。だから解放してくれないか？」

「良いだろう」

ふっ、さすがはFクラス。バカばかりだ。

「ちょっと待つんだみんな！それだと僕だけが被害者ということになる！というか聡！キサマ僕を売って自分だけ助かる気だろ！」

当たり前じゃないか。何を今更。

「待ってください！違います！」

みんなが明久に襲いかかろうという時、姫路さんがそんな言葉をみんなに言う。

するとみんなの視線が明久から姫路さんに移り変わる。

「あ……、そうじゃなくて、え、っと、その、」

思っていたより視線を集めてしまい、顔を赤くしてもじもじと何を言おうか考えている姫路さん。

「このお弁当は……その……」

必死に明久を解放させようと、頑張っている。そんなにも明久のことが……！

「……きやつ」

「拷問してから死刑！」

火に油を注ぐとはまさにこのこと。その後明久は死刑というのりンチを受けていた。

「じゃあせつかくだし、屋上で食べようか？明久も待ってれば来る」

「そうじゃな」

「……ここで食べるのは命に関わる」

うん。ここじゃ折角の美味しいお弁当が美味しく食べれない。

美波の弁当も食べれるんだし。

ってあれ？

「あれ？美波は？」

「そついえば見ないのう」

「じゃあ葉月が探してくるですっ」

美波どこに行っただろう。トイレかな？せつかく葉月ちゃんがお弁当持ってきてくれたのに。

そんなことを思いながらも、俺達は屋上へと足を運んだ。

「……バカ」

美波が廊下でそんなことを呟いているなんてことは、想像もしていなかった。

第二十問目

く屋上へ

「「「おおーっ！」」」

屋上に着き、姫路さんのお弁当の中身を見ると俺達は一斉に歓声をあげた。

ちなみに屋上に来ているのは俺、秀吉、ムッツリーニ、そして少しボロボロになっている明久の4人。

雄二はきつと今頃、霧島さんと甘いひと時を過ごしていることだろう。

「あ、味はあんまり自信ないんですけど……」

そう恥ずかしそうにはにかむ姫路さん。

から揚げやエビフライ、おにぎりにアスパラ巻きといった定番メニューがとても美味しそうに並べられている。

これで美味しくないはずがない。

「じゃあ美波もないし、先に食べようか　　ってムッツリーニ早いな……」

ムッツリーニは素早い動きでエビフライをひとつ取り、口に運んだ。

人が食べている姿を見ると、ますますそれが美味しそうに感じられる。

さて、俺もいただきますか……。

バタンッ

から揚げをひとつ取って口に運ぼうとした瞬間。

ムツツリーニは豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」

あわててから揚げを置いて秀吉と明久と目を合わせる。

「土屋君!？」

姫路さんが慌てて、ムツツリー二のことを心配する。そりゃそうだろう、自分が作った料理を食べた瞬間あんなに派手に倒れたんだから。

しかし次の瞬間、ムツツリー二は何事も無かったかのように、スクッと立ち上がった。

そして姫路さんに向けてグッドという意味で親指を立てた。

「……………(グツ)」

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

普段口数の少ないムツツリーニだし、そのジェスチャーだけでも十分姫路さんには『美味しかった』という意味で通じるだろう。

でもなんで足がガクガクと震えているんだい？K O寸前のボクサーの物真似でもしているのかい？

「良かったらどんどん食べてくださいね？」

ムツツリーニの感想を受けて多少自信を持ったのか、姫路さんが俺達に笑顔でそう勧めてくる。

そんなに嬉しそうに勧められると断るに断りきれない。

でも先ほどのムツツリーニの様子が忘れられない。

「秀吉、明久、どう思う？」

姫路さんに聞こえないぐらいの声で秀吉と明久に話しかける。

「どっつ見ても演技には見えないのっ」

「うん、どう見てもあれは演技じゃないよね……」

2人も姫路さんに聞こえないぐらいの声で返してくる。

姫路さんは未だに笑顔のままだ。この会話を聞かれるわけにはいかない。

「お主ら、身体は丈夫か？」

「正直胃袋には自信がないよ。食事の回数が減って退化しているから」

「俺も美波に関節技をかけられまくって身体には自信がないな、胃とかは多分人並みぐらいだと思うけど……」

「ならばここは、ワシに任せてもらおう」

勇気のある秀吉のセリフ。秀吉！なんて勇者だ！

「そんな危ないよ！」

「大丈夫じゃ、ワシの胃袋はこう見えてジャガイモの芽を食べても
なんともないのじゃ」

とても外見ではイメージできないけど、秀吉は随分と丈夫な胃袋を
持っているみたいだ。

ジャガイモの芽ってたしか結構毒を持っているらしいけど……。

「でも秀吉がいなくなったら……」

「僕たちは誰の写真を生かがいにしていけばいいのさ……」

「お主ら。後でムツツリーも含めて少し話があるのじゃ」

「はあ、まったく酷い目にあつた……」

そんな話をして、目の前の殺人料理をどうしようか考えていると、ポロポロになっている雄二が屋上にやってきた。

制服はとこるところ敗れているし、手や足や顔にはたんこぶや内出血も見える。

何をされたのかなんてことは、聞かなくても十分に想像ができる。

「あ、雄二。生きてたんだ」

「ふっ、これぐらいで死ぬと思われちゃ困るな。お、どれどれ、美味しそうじゃないか」

「あ、雄二」

明久の止める声も間に合わずに雄二はから揚げをひとつつまんで口に運んだ。

そして先ほどのムツツリーニと同じように、顔から倒れた。

「「「・・・」」」

再び顔を合わせる俺と明久と秀吉の3人。

先ほどと違うのは、背中を流れる冷や汗の量。

間違いない。このお弁当は・・・殺人兵器だ！

「（毒を盛ったな・・・？）」

小刻みに震えている雄二が目でそんなことを訴えてくる。

「（どうやらこれが姫路さんの実力みたいだ・・・）」

俺も同じく目で返す。普段いつも一緒にいるからこそできる技。今となれば簡単なことだ。

「さ、坂本君、どうしたんですか？」

「あ、足が攣ってな……」

「あはは、霧島さんから逃げるために全力疾走でもしてたんじゃないか」

「うむ、そうじゃな」

「そ、そうですか。大丈夫ですか？」

「ああ、もう大丈夫だ」

何とか姫路さんに怪しまれることもなく誤魔化せた。雄二の頭の回転が速くて助かった。

さて、ここからが問題だ。

「（明久、今度はお前が行け！）」

「（無理だよ！僕が行ったら死んじゃうよ！）」

「（何か問題あるか？）」

「（何も無いよな・・・？）」

「（薄情物ー！）」

「(ワシも先ほどの雄二の反応を見ると、決意が鈍るのう……)」

「(聡が行きなよ！これから僕達は帰るだけだけど、聡は部活があるんでしょ)」

「(そうだと、ちゃんと食べておかないと部活で力が発揮できないぞ)」

「(それなら秀吉も同じじゃないか！)」

「(ワシは演劇部で文化部だからサッカー部の聡よりはそんなにエネルギーは使わないのじゃ)」

「くっ、それなら明久が食べるべきだろ！ただでさえ塩と水しか食べて無いんだから！」

「そうじゃな、明久が食べると良い」

「い、いや、僕はさ、ほら、もうその生活に慣れたから」

「でも、姫路さんは一番明久に食べてもらいたいんじゃないか？」

「確かにそうだな、明久行け」

「いや、僕よりも聡とか雄二とかに食べて欲しいんじゃないかな
！」

「（それはないと思うがのう……）」

これが友達同士の会話だと思える人はかなりハイレベルな人だと思う。

でも、これは何よりも大切な命がかかっている。友達だからと言って甘くみていれば命はない……！

「（ええい、往生際が悪い！）」

「あっ！姫路さん、あれなんだ？」

「えっ、どこですか？」

明久が急に空の方を指差して、そんなことを言った。

姫路さんだけでなく、俺や雄二も明久の指した明後日の方向を向いた。

「（おらああ！）」

「（もがあああ！）」

明久はその隙に弁当を雄二の口の中いっぱい押し込んでいた。

目を白黒させているのを見れば、顎を掴んで無理矢理噛ませていた。

「ふう、これでよし」

「お前、残酷だな」

「随分と鬼畜じゃな」

まあでも一応これでなんとか危機は乗り越えられた。

「ごめん、見間違いだったよ」

「そうですか」

そんな明久の3秒で考えたようなバカな作戦に引っかかってくれる
姫路さんは、なんて純粹なんだろう。

「美味しかったよ、お弁当」

「うむ、なかなかの腕前じゃった」

「ありがとう姫路さん。これで部活頑張れそうですよ」

とりあえず雄二と明久のおかげで一段落は落ち着いた。

俺達の気持ちはこの青空のように晴れやかだ。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか」

「うん、とくに雄二が『美味しい』って食べちゃってね」

視界の隅で力なく首を振っている雄二は見なかったことにしよう。

「そうですね、嬉しいですっ」

「うん、ありがとうだね。おかげでまともなカロリーが久々に取れた
よ」

そして倒れているムッツリーニと雄二以外の4人で笑い合う。ほのほのとしていてとても良い時間だ。

「あ、そうでした」

「ん？どうしたの？」

姫路さんがポン、と手を打った。なんだろう、嫌な気がするのはいのせいだろうか。

「実はですね　デザートもあるんです」

「あ！姫路さんあれなんだ！」

「明久！次はいくらなんでも死ぬ！」

明久が先ほどと同じ作戦で雄二に食べさせようとする、雄二が命がけで止めに入る。

そりゃそうだろうね。1回や2回で耐性がつくほど姫路さんの料理は甘くなさそうだから。

「（明久、俺を殺す気か！）」

「（仕方ないんだよ！これは雄二にしかできない大切な任務だ！）」

「（そうだよ！俺と明久はもう宣戦布告という任務を試召戦争で任されたから、今度は雄二の番だ！）」

「（何故そうなる！ええいもう仕方ない！そこまで言うならお前にやらせてやる！）」

「（なっ！その構えは何のつもり！？）」

「（拳をお前の鳩尾に打ち込んだ後に存分に詰め込んでやる！）」

「（いやあー！殺人鬼！聡も雄二に協力して抑えないでよ！）」

あわや大乱闘が起ころうかという時、秀吉がすっと立ち上がった。

「……………ワシが行こう」

「ひ、秀吉！？ダメだよ！死んじゃうよ！」

「（そ、そっだよ秀吉！秀吉がいなくなったらどうやってこれから生活していけばいいんだ！）」

「（俺のことは率先して犠牲にしたよなっ！？）」

当たり前じゃないか。雄二なんかよりメインヒロインである秀吉の方が重要に決まっている。

「（大丈夫じゃ、ワシの胃袋はかなりの強度を持っておるから、せいぜい消化不良程度じゃろっ）」

たしかにジャガイモの芽を食べてもへっちらな胃袋なら、雄二やムツリーニほどの大惨事にはならないかもしれない。

「どうかしました？」

「あ、いや、なんでもないよ」

「あ、もしかして……」

姫路さんが顔を曇らせる。やばい、ひょっとして嫌がっているのがバレた？！

「ごめんなさい。教室にスプーンを忘れてきちゃいましたっ」

言われてみればたしかにスプーンはない。

デザートの中身はヨーグルトと果物のミックスのようなもので、たしかに箸で食べるには適さないかもしれない。

「取ってきますね」

そう言って姫路さんは廊下へと姿を消していった。ここはチャンスだけ……。

「では今のうちに頂くとしようかのじゅ」

「……すまん、恩に着る」

「ごめん秀吉。ありがとう」

申し訳なさで下を向いている俺達に秀吉はフツと笑いかけ、続けて言った。

「別に死ぬわけでもあるまい。そう気にするでない」

「そ、そうだよね！」

「そつだな！秀吉、任せたぞ！」

「うむ、じゃあいただくのじゃ」

容器を傾け、やりずらいたろつけど箸でデザートを一気にかきこんだ。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃっゴバアあっ！」

また一輪、花が散った。命という儂い花が。

〈美波Side〉

「せっかく作ってきたのに……。やっぱりあの時意地なんて張らずに瑞希のと一緒に食べてもらえば良かった……。」

ウチは今、校舎の外の中庭の噴水のベンチにいる。

あの時、瑞希がみんなにお弁当食べてって言ったとき、聡まで嬉しそうに顔をしてたから思わず走ってきちゃったけど……。

今じゃ残るのは後悔だけ。

「はあ……腹減った……。」

そんな憂鬱な気持ちでいると、偶然なのか、考えていた人物の声が聞こえてきた。

声のする方を見てみると、お腹の辺りを押さえて一人でとぼとぼと歩いている聡の姿があった。

さっきの独り言と言い、今の仕草と言い、随分とお腹空かせているみたいだけど……。

……瑞希のお弁当食べてないのかな？

それなら、今からお弁当渡せば、食べてくれるかな？

「おにいちゃん！」

「あれ、葉月ちゃん。美波は見つかった？」

すると、今度は葉月の声も聞こえてきた。

「まだ見つかってないんですっ」

「そっか、どこ行ったんだろっね」

葉月と聡の会話からして、聡はウチのことを探していてくれたいたのかな？

ゲウウウ

そんなことを思っていると、誰かのお腹が鳴る音が聞こえた。ウチじゃないから、きっと聡か葉月だと思う。

「お腹空いてるの？」

「うん、色々あってまだ何も食べてないんだ……。はあ、美波のお弁当ももらえてたらなあ……。」

「お姉ちゃんのですか？」

「うん、どんなお弁当作ってたんだろう、って。食べたかったな」

・・・聡。

よし、今ならきつと渡せる！勇気を振り絞って！

「さ、聡、お、お弁当・・・」

「お弁当食べましょうお姉様！」

「み、美春！？」

もう少しというところで邪魔が入った。

美春は1年生の時から友達なんだけど、他の友達と比べてスキップの度が超えている。

「探しましたわお姉様！腕に海苔をかけて作った美春特製のお弁当を召し上がってください！」

「な、なんでアンタがここにいるのよ！Dクラスは補習なんてないでしょ！」

「お姉様がいるなら日曜日でも来ます！お姉様がいなければ平日でも来ません！」

「ど、どうしてこの学園は常識が揺らいでいる人ばかりなの！」

ああ、もう！こんなことをしてる暇はないのに！

ってアレ？聡と葉月は？もうどこか行っちゃった？

急いで美春を撒いて二人を探さないと。

部活があるらしいから、それまでに食べてもらわなきゃ！

「もうお姉様ったら・・・そんなに恥ずかしがらなくても良いのに。お姉様！お姉様！どこですか？」

お姉様お姉様と連呼しながら走っているのか、段々と声が遠くなくなっていった。

まったく美春つたら・・・

そんなことよりも、早く聡たちを探さなきゃ！

そしてウチは聡の行きそうな場所を探し尽くした。

下駄箱、部室、屋上、グラウンド、職員室。

他にもこの前のBクラス戦で聡と入ったあの準備室にも行ったけど

居なかった。

あと聡が行きそうな場所は……うん、あそこしかない。

2年Fクラスだ！

「ハイスイコー！もっと早く〜！」

「廊下は走っちゃだめだよ〜」

2年Fクラスの前で、丁度廊下の階段の方から聡と葉月の声がした。

思わずその姿を見て恥ずかしくなり、一回Fクラスに入ってしまった。

でも、早くしないと部活が始まっちゃうし、何よりこの焦りの気持ちを早くどうにかしたい。

と思って窓の方からその姿を見た。

「はあ、腹減った」

葉月を肩車しながらも、腹を抑えてそんな仕草を見せる。よし！

「今度こそ聡にお弁当を……」

思ったことが思わず口に出てしまったけど、今は気にしている暇はない。早く渡そう……！

「……やはりそうだったのか」

そんな決意をすると、不意に後ろから男子のような低い声が聞こえてきた。

振り向くと、覆面を被った多分Fクラスの男子共に囲まれていた。

「……椎名のやつは婚約者がいるだけではなく、2人もの女子からお弁当を作ってもらっていたのだな」

「……これは許されざる事実」

「……裏切り者に死を」

「「「「裏切り者に死を！」「「「「」

「ち、違うのよ！これはそうじゃなくて……そうじゃなくて……」

このままじゃ聡がコイツらに捕まっちゃう。そしたらますます弁当なんて渡せなくなる。

「じゃは……あの……」

でも何て言えばいいかな。結構ドイツでの生活が長くてあんまり日本語得意じゃないし……

「あはっ
」

「裏切り者に死を！」

「「「「裏切り者に死を！」」」」」

「ちょ、お前等なんだよー！うわあぁっ！常識歪んでいるよー！」

3秒後に聞こえてきたのは幼馴染の悲鳴だった。

「はぁ・・・何してるんだろウチ・・・」

結局あの後も聡に渡すことはできなかった。

出てくるのはため息ばかり。はぁ、お弁当も渡せないなんて・・・

あの時までには普通に接していられたのに、なんかあの時以降はウチが一方的に変な意識しちゃって。

「いけー！ハルウラー！」

「廊下は走っちゃだめだよ……」

「……は廊下じゃないですよ。」

「今日はもう燃料切れなんだよ……」

そんなやりとりをしながらこっちに向かってくるのは聡と葉月。

ちょっと弱気になっちゃってたけど……、時間的にもこれが弁当を渡す最後のチャンスよね……。

お弁当食べる？お弁当食べる？お弁当食べる？よし、これでイメー
ジトレーニングはOKよね。

よし、ウチ、気合入れるのよ！

「聡」

「ん、美波」

「お姉ちゃん！お兄ちゃんにたくさん遊んでもらってたですっ」

そう言ってウチに抱きついてくる葉月。本当に人懐っこいんだから。

「良かったわね。迷惑かけじゃだめだよ？」

「うん！」

「……それで、聡。お昼は食べた？」

「いや、色々とあってまだ食べれてないんだ……」

その頭をポリポリとかきながら言う聡。

「そう。じゃあ、その、え、っと、もし、お腹空いてたらだけど、

でももう時刻は2時近くだし、今しかチャンスはない。言うしかない！で、でも……

「お……お、お、長万部の特産ってな〜んだ？」

「へ？」

し、しまった〜！な、なんで長万部なんて、言っちゃったんだろう……

で、でも、もう一回。もう一回言い直せば……！

「おーい、椎名。そろそろ集合時刻だぞー！」

そんな中、遠くの方から聡を呼ぶ声が。きっと会話の内容からしてサッカー部の人だろう。

「おう、わかった。今行くよ！美波。長万部って何だ？」

「ううん。なんでもない……。部活頑張ってる」

「？わかった」

そう言って部室の方へと走っていく聡。はあ。結局言えなかったか。
。。。。。

でも、もう、仕方がない……のかな。

「葉月。お昼は？」

「そういえば、お兄ちゃんと遊んでたら忘れちゃったですっ」

「もうちゃんと食べなきゃだめじゃない。大きくなれないわよ」

「これお兄ちゃんのじゃないの？」

「そんなわけないでしょ。これは葉月に作ったのよ」

「それじゃ一緒に食べるですっ！」

「うん」

そうよ、このお弁当は葉月に作ったのよ。別に聡に作ったワケじゃないわ。

。そう心に訴える。だけど、それだけで誤魔化せるはずもなく……

「あ、ごめん葉月。お姉ちゃんちょっと忘れ物しちゃったから、先に帰って食べててくれる？」

「わかったですっ」

葉月はそう言って走って校門を通過して帰っていった。

空が薄っすらと、夕日に変わろうかというこの時間帯。

それぞれの部活動の掛け声や、先輩や顧問の先生の檄が飛ぶ。

その後、ウチは一人屋上でサッカー部の活動をボーッと眺めていた。

アイツは無邪気にサッカーボールを追いかけている。まるで子供みたい。いつまでたっても。

あんなに楽しそうに……。人の気持ちに気づかないで……！

でも、そんなこと言ったって悪いのは全部ウチ。ウチのせい。

あの時に素直に『食べて』って言えていれば。

もう……、こんなお弁当……。やっぱり女の子らしさとかを今更ウチがしたって意味ないのかな……。

そんなことを思いながら弁当を開けてみる。

お弁当の中身は、全体的に左の方に寄ってしまっていて、お世辞にも美味しそうには思えなかった。

そのお弁当を見ると、なんだかますます悲しみがこみ上げてきそうになって…………。

「聡のバカ！本物のバカ！サッカーバカ！誰がもうアイツなんかに弁当なんて…………！」

思わず自棄食いしながら、そんなことを言った。

でも、そんなことをしてもウチの気持ちは晴れるはずもなく…………。

「・・・・・・・・バカ」

切ない気持ちばかりがこみ上げてきた。

もう夕方だし、帰ろう。弁当はもったいないけど、もう食べれないから帰りにゴミ箱に捨てて帰ろう。

そう思ってウチは外にあるゴミ捨て場所に向かった。

〈聡Side〉

「はぁー腹減った……」

ただいま部活真っ只中。大会前だからということもあるけど、かなりビッシリとした厳しい練習をこなしている。

とりあえず昨日の夜ご飯から何も食べてないから、もう俺の身体にエネルギーなんてものはもうほとんど残ってない。

547

「ふっ、なんだ、もうギブアップなのか？サッカー部のエースさんは体力ねえな」

そんな俺の疲れきっている姿に気づいて、ライバルというか、天敵である根本が余裕そうな顔をして話しかけてくる。

この前の試召戦争は色々と彼にとって絶望的な経験だったと思うから、少しは反省したかと思っただけど、まだそこまで堪えてないみたいだ。

「趣味が女装なヤツに言われたくないな」

「なっ！？それは違う！お前や坂本が無理矢理やったんだろ！？」

「実はその後本当に目覚めてしまって、家で一人でスカートとか穿いてるんじゃないの？」

「んなワケないだろ！」

「おい、そこ！椎名に根本！何サボってペラペラ喋ってやがる！」

根本が熱くなつたせいで、先輩に怒られたじゃないか。しかもよりよつて常村先輩かよ……。俺あの先輩苦手なんだよな……。

自分で言うのもアレかもしれないけど、俺って結構人の好き嫌いつてあんまりないほうだと思う。

明久みたいに人間的に優しい。とかじゃないけど、まあ、あんまり他人に興味がないのかな……。

実際にこのサッカー部内で、練習が厳しいと割りと嫌われがちなきゃプテンや顧問の先生だって、別に好きってわけじゃないけど嫌いつてわけでもない。

じゃあ、何故そんな俺がこの先輩を苦手意識しているのかというと・
・
・

「すみません、常村先輩。椎名が突っかかってきたんで」

「ああ？椎名、またお前か！まったく、一番うまいからって調子乗ってんじゃないぞ！」

まあ、一言に言えば根本絡みで、いわゆる不良っぽいというか、やたらと突っかかってくるからだ。

「お前さつきから全然集中して練習してないよな、大会前だっというのに。ちょっと学校周り走って来い！」

まあたしかに調子悪くてそこまで集中してなかったけど、この人ほ

ど集中してなかったワケじゃない。

まあ、サボりの常連だからね。

「ウーッス」

まあ色々と言いたいこともあったけど、自分も集中できていなかったし、何より面倒なことになるのはごめんだ。

適当に生返事を返してとつとつとグラウンドから姿を消して、学校から一旦出て外周をするために、まずは中庭へと向かった。

中庭を通りかかっていると、ゴミ箱の辺りに一人の人影があった。

学校内はここの中庭のゴミ箱の近く以外は禁煙になっている。そのためよく教師がここで喫煙するのはよく目にするけど、見てみればその人影は女子生徒の制服を着ていた。

遠くからじゃよく見えないけど……随分と身体（胸を含む）が細くて、髪がポニーテールだ。……って、あれは美波か？

こんな時間に、しかもこんなところで何をしているんだろう？

「美波？」

「ち、聡？」

走って近くに行って確認してみると、やはりその姿は美波で正しかったみたいだ。

まあそうだよな。あれほど遠くから見て胸がないと分かるのは美波ぐらいか。

「何か勝手に右手に拳ができていたんだけど、何か失礼なこと考えてない？」

「は、まさか。それよりこんなとこで何してるのね。」

「え？え、つと、それは……」

何か言いずらそうにしている美波の拳のできてない方の手には、ひとつの弁当があった。

そのお弁当のふたは開かれていて、中には右に左に寄っているおかずやご飯たち。

あ……、そういえば今日俺に作ってきたとか、くれるとか補習の後に話してたっけ？

でも、結局美波がどっか行っちゃったり、姫路さんの弁当がアレスぎてなんだかんだ言っつて、まだ食べれてなかったよね。

ふたを開けて、このゴミ箱の前にはいるっていつとは……？

「……それ、捨てるの？」

「な、なによ」

「い、いや、その、さ、せっかく作ってくれたって言ったのにまだ食べれてなかったから、さ」

「っ！アンの為に作ったんじゃないわよ！あまっちゃったから持ってきたのよ」

「それでも良いよ。俺にくれるって言ったんだから。折角美波が作った弁当、捨てちゃうのは勿体無いと思っただけだよ」

「さ、聡……」

な、何言ってるんだ俺！確かに腹が減りすぎて何とかカロリーを摂取したいとは山々だけど、それだとまるで美波の弁当が食べたいって言ってるみたいなものじゃないか！

「な、なーんてさ、じよ、冗談だよ。ゴミにするのは勿体無いし、たまたま腹も減ってるし、お金も勿体無いし環境にも悪いから……
・さー！」

「くすっ、あは、あははっ」

誤魔化そうと、そんなことを言ったら美波に笑われた。

べ、別に笑わなくても良いじゃないか。どれだけ腹減ってると思っ
ているんだ。

「はい」

「え？」

美波が笑い終わったと思えば、今度は弁当を俺に差し出してきた。

「食べるの？食べないの？」

「え、じゃ、じゃあもらおうかな！今月はちょっとピンチだったし！」

なんだか、素直に言うのはなんだか恥ずかしい気がしたから適当な理由をつけて言った。

すると美波は飛びつくように、俺の前に来て弁当を俺の両手に持たせた。

あまりはつきりとは見えてないけど、俺に弁当を渡したときの美波の顔は、どこか嬉しそうな顔だった。

「……………つて、美波？」

そして何歩か歩いて俺から離れると、再びこちらに振り向いてこう言った。

「バーカ」

そう言ったときの美波は、今度ははっきりと見えていて、正直ドキッとしてしまうぐらい、可愛くて爽やかな笑顔だった。

第二十問目（後書き）

原作でお馴染みですが、常夏コンビのモヒカンの方（？）は聡と同じサッカー部という設定です。普通にもう片方の坊主の方もそうなのだと思いますが。原作とは異なっている設定なので、ご了承ください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7357k/>

バカとテストと召喚獣～in文月学園～

2010年10月10日14時37分発行